

原 著

結核性頸部淋巴腺炎ノ統計的觀察

慶應義塾大學醫學部理學的診療科教室(主任 藤瀨教授)

醫學士 福 岡 善 二 郎

目 次

第一章 緒 言	第五章 頸腺結核ト他疾患トノ關係
第二章 頸腺結核患者ノ性及ビ年齡	第六章 頸腺結核ノ「レ」線治療成績
第三章 頸腺結核ノ罹患狀況	第七章 結 論
第四章 頸腺結核ノ性狀	主要文獻

第一章 緒 言

米國醫 Williams 及ビ Pusey 兩氏ガ 1902 年(明治 35 年) 淋巴腺結核ノ「レ」線放射療法ヲ公表セシ以來、之レガ治療效果ニ關スル報告ハ東西ヲ通ジ枚舉ニ違ナシ。

佐藤(進)、鶴田兩氏ノ明治 36 年日本外科學會ニ於ケル頸腺結核ノ宿題報告ハ我邦頸腺結核統計ノ最初ノモノニシテ、當時ハ觀血の施術ナリキ。三輪ハ明治 42 年、77 例ニ就キテ詳細ナル調査ヲ爲セシモ專ラ外科的處置ヲトレリ。

本邦ニ於テ「レ」線放射治療ヲ最初ニ發表シタルハ明治 44 年 9 月土肥(章司)ノ 4 例ナルモ、氏ハ更ニ翌年 8 月 11 例ヲ追加シテ詳細ナル治療經過並ニ治癒機轉ヲ述べ、前後合計 15 例ノ内 7 例(46.7%)ハ腺腫ノ縮小殊ニ顯著ニシテ全治ノ域ニ達シ、6 例ノ輕快、2 例ノ不變ヲ示セリ。肥田ハ明治 45 年 4 月日本外科學會ニ於テ 24 例ヲ報告シ、内、大半ハ治療續行中ナルモ確カニ治癒ト見ルベキモノ 6 例(25.0%)、ソノ他ニ於テモ效驗明ラカナルハ爭フ可ラズトシ、更ニ大正 3 年同氏ハ 101 例ノ内 6 例(6.2.4%)ノ治癒、輕快 33 例、效果不明 5 例ノ好成績ヲ舉ゲタリ。兩氏ハ「レ」線放射ヲ主トシ、傍ラ尙、外科的手術ヲ施シタリ。丸山ハ大正 2 年 32 例ノ内、14 例(43.8%)ノ治癒ヲ、藤浪、山田ハ大正 3 年 61

例ノ「レ」線放射ニテ、内、28 例(45.9%)ノ治癒率ヲ得、服部ハ大正 3 年 208 例ニ就キテ、臨牀上ヨリ種々統計的觀察ヲ下シ、内、34 例ニハ摘出術ヲ、37 例ニハ「レ」線放射ヲ主トシタル兩成績ヲ比較シテ「レ」線放射ノ外科手術ニ勝レルヲ説ケリ。

斯クテ大正初年ヨリ「レ」線療法ハ漸ク勃頭シ、外科手術ニ代ラントスル傾向アリテ、次第ニ専ラ「レ」線放射治療ヲ行フコト、ナリ、又、技術ノ進歩ト共ニ益々好成績ヲ收メ、河内山、飯森中村、佐藤(銀一)、川瀬、池田、三矢、林(信雄)、莊、金澤、林(昌隆)、白井・平野、何レモ約 60 乃至 80%ノ治效率ヲ示セリ。

更ニ、頸腺結核ト他ノ内部的疾患トノ交渉ヲ論ズルモノアリテ、鳥居、富田、山崎ハ該患者ノ胸廓内「レ」的所見ト頸腺結核トノ因果關係ヲ探究シ、一國民疾患トセラル、頸腺結核ノ治療上ニ有益ナル思索ヲ齎シタリ。

凡ソ、諸疾患ノ研究ニ當リテ統計的事實ノ閉却シ得ザルハ言フ迄モナク、本疾患ニ關スル統計的觀察モ尠トセザルガ、多クハ斷片のナルモノニシテ、而モ、ソノ成績必ズシモ一様ナラズ。依テ、余ハ曩ニ大正 13 年 1 月以降昭和 8 年 12 月ニ至ル滿 10 ケ年間ニ互リ當教室ニテ治療セル

頸腺結核患者 3449 例ヲ種々ノ方面ヨリ精細ニ觀察シ、統計的考察ヲ重ネ、内、経過明確ナル

1804 例ニ就テハ「レ」線治療成績ヲ調査シテ、本疾患ノ治療方針ニ資料ヲ提出セントス。

第二章 頸腺結核患者ノ性及ビ年齢

一、性別ニ就テ

頸腺結核ハ、他ノ結核ノ如ク、男女何レニモ襲來スルモノニシテ、余ノ調査シタル當該患者 3449 例ノ内、男子 1426 例 41.3%、女子 2023 例 58.7%トナレリ。

内務省全結核死亡統計ノ男女別ヲ參酌スルニ、昭和 2 年乃至昭和 7 年ノ 6 ケ年間ニテ男子 49.5%、女子 50.5%トナリ男女略々大差ナキヲ示セリ。

本邦ニ於ケル諸家ノ頸腺結核患者統計報告ヲ通覽スルニ(第 1 表參照)、三輪、飯森ノ二氏ヲ除ク他ノ 13 名一ハ悉ク女子ニ多シトセリ。而シテ、

文獻報告例ヲ聚集スルニ總數 2901 例トナリ、内、男子 1254 例 43.2%、女子 1647 例 56.8%ニシテ、女子ハ男子ヨリ 419 例 13.6%ノ多キヲ示シ、余ノ成績ト略々同様ナリ。男女率ガ内務省全結核死亡統計ニ比シテ異ナレルハ後述ノ如キ事情ガ女子ヲシテ醫治ヲ乞ハシムル機會多キヲ與ヘタル結果、「レ」放射患者ニ女子ノ多キ所以トナレルニ非ラズヤ、但シ、三輪、飯森ニハ男子ガ多シト謂ヘルハ統計材料少キト當時專ラ手術ヲ施シタルノミナレバ、患者ノ受療ニ相當ノ選擇的關係アリテ、女子ノ之レヲ避ケタル爲ナラン。

第 1 表 邦人諸家報告ノ男女罹患率

時代	報告者	年代	報告數	男 (%)	女 (%)	差 (%)
第一期	佐藤(進)	明治 36	762	361 (47.4)	401 (52.6)	40 (5.2)
	三輪	明治 42	77	43 (55.8)	34 (44.2)	⊗ 9 (11.6)
第二期	肥田	大正 3	101	42 (41.6)	59 (58.4)	17 (16.8)
	服部	大正 3	208	86 (41.4)	122 (58.7)	36 (17.3)
	飯森	大正 5	89	48 (53.9)	41 (46.1)	⊗ 7 (7.8)
第三期	池田	大正 13	661	268 (40.5)	393 (59.5)	125 (19.0)
	鳥居	大正 13	120	48 (40.0)	72 (60.0)	24 (20.0)
	富田・山崎	大正 14	84	36 (42.9)	48 (57.1)	12 (14.2)
	林(信雄)	大正 14	72	19 (26.4)	53 (73.6)	34 (47.2)
	三矢	大正 15	88	26 (29.5)	62 (70.5)	36 (41.0)
	金澤	昭和 4	172	76 (44.2)	96 (55.8)	20 (11.6)
合 計	林(昌隆)	昭和 8	35	13 (37.1)	22 (62.9)	9 (25.8)
	白井・平野	昭和 10	433	188 (43.5)	244 (56.5)	56 (13.0)
	福岡	昭和 10	3449	1426 (41.3)	2023 (58.7)	597 (17.4)
合 計		6350	2680 (42.2)	3670 (57.8)	990 (15.6)	

(備考) 飯森氏報告ニハ頸腺以外ノ淋巴腺結核 9 例ヲ含ム

⊗印ハ男子ニ多キヲ示ス

頸腺結核治療法ヲ歴史的觀察ヨリ 3 期ニ分ツベシ。即チ主トシテ觀血の手術ヲ施行シタル時代(第一期)、觀血の手術ト「レ」線放射トノ併用時代(第二期)、「レ」線療法ヲ主トスル現代(第三期)トス。而シテ女子ガ第一期、第二期、第三期ノ經年ニ從ヒ、ソノ受治率ノ増加スルニ至レルハ統計ニヨリテ知ル所ナリ。之レ即チ、「レ」

線療法ガ手術ヲ加ヘザルヲ以テ癍痕ノ生成ヲ避ケ、毫モ容貌ヲ毀損スルコナク、又ソノ術モ一層簡易ニシテ苦痛ヲ與ヘザルコトヨリ女子ヲシテ好ンデ「レ」放射ヲ受ケシムル機會ヲ多カラシメ、第二期以後ニ於テ著シク増加シ、男子ヲ凌グコト、ナリテ、内務省全結核統計ト趣ヲ異ニスル所以トナレルモノナリ。從ツテ頸腺結核患

者數ノ性的差異ハ、性別ニヨリ發生ヲ異ニスルモノ一ハ非ズシテ、女子が美容上進シテ治療ヲ乞フモノ多キタメト思考ス。即チ、頸腺結核罹患ノ實際ニ於テハ内務省全結核統計ト同様男女略々同率ナリト思考スルモ可ナラン。

二、罹患年齢ニ就テ

頸腺結核ハ何レノ年齢ニ於テモ襲來スルモノニシテ、余ノ 3449 例ニ於テハ男女共ニ 2 歳ニ始マリ、最高男子 79 歳、女子 85 歳ノ各年齢ニ之

レヲ見タリ。

今、本邦諸家報告ノ頸腺結核罹患年齢ヲ觀ルニ(第 2 表參照)、肥田、服部、鳥居、白井・平野、三矢、金澤ハ何レモ 11—20 歳ニ最高(平均) 43.2%、次位ハ 21—30 歳(平均) 36.9%トセルモ、佐藤、三輪、池田、富田・山崎ハ何レモ 21—30 歳(平均) 38.2%ニ多ク、11—20 歳(平均) 36.3%次位ヲ示セリ。

余ノ統計ニ於テハ後者等ノ如キ順位ニ屬シ、21

第 2 表 邦人諸家報告ノ罹患年齢

報告者	報告數	1—10(%)	11—20(%)	21—30(%)	31—40(%)	41—以上(%)
肥田	101	16(15.8)	41(40.6)	29(28.7)	12(11.9)	3(3.0)
服部	208	7(3.4)	95(45.7)	87(41.8)	13(6.2)	6(2.9)
鳥居	120	7(5.8)	52(43.3)	49(40.8)	10(8.3)	2(1.7)
白井・平野	432	57(13.2)	169(39.1)	153(35.4)	42(9.7)	11(2.6)
三矢	88	3(3.4)	42(47.7)	38(43.2)	2(2.3)	3(3.4)
金澤	172	15(8.7)	85(49.4)	58(33.7)	13(7.6)	1(0.6)
佐藤(進)	755	85(11.3)	268(35.5)	284(37.6)	81(10.7)	37(4.9)
三輪	77	4(5.2)	27(32.1)	34(44.2)	7(9.1)	5(6.5)
池田	661	77(11.6)	249(37.7)	251(38.0)	64(9.7)	20(3.0)
富田・山崎	84	5(6.0)	29(34.5)	33(39.3)	12(14.3)	5(6.0)
福岡	3449	462(13.4)	1106(32.0)	1334(38.7)	377(11.0)	170(4.9)
合計	6147	738(11.9)	2163(35.2)	2360(38.4)	633(10.3)	263(4.3)

—30 歳 38.7%、11—20 歳 32.0%トナレリ。

而シテ、以上ノ文献報告例並ニ余ノ調査例ヲ合算スルニ、21—30 歳 38.4%、11—20 歳 35.2%、1—10 歳 11.9%、31—40 歳 10.3%、41 歳以上 4.3%ノ順位ヲ示セルモノニシテ、之レヲ内務省昭和 6 年度全結核死亡年齢ニ比較スレバ 20—29 歳 34.1%、10—19 歳 25.6%、40 歳以上 18.8%、30—39 歳 14.8%、0—9 歳 7.1%ノ順位ニシテ、兩者ノ示ス 10 年期別ニハ 1 年ノ早遅アリ、全く同年期ニハ非ラザルモ、之レヲ通覽スルニ最高年齢期ハ同ジク、唯、全結核ニ於テハ比較的高年齢者ニ、頸腺結核ニテハ若年者ニ多キモノナルヲ窺知スベシ。

更ニ、余ノ調査年齢ヲ詳記スレバ(第 3 表參照)、男女合計 1—5 歳 3.1%ナルモ、6—10 歳ニ至リテ著シク増加シ 10.3%ヲ示ス。而シテ、10 歳未滿ニテハ男子罹患率多ク 16.4%、女子 12.3%ナリ。11—15 歳ニ於テハ男女共ニ増減ノ差少

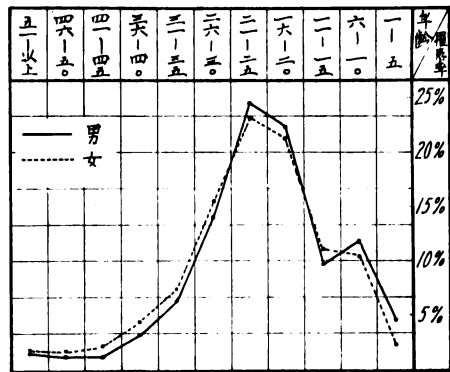
第 3 表 年齢及ビ性別

年齢別	男(%)	女(%)	合計(%)	
幼年期	1—5	64(4.5)	42(2.1)	106(3.1)
	6—10	169(11.9)	187(10.2)	356(10.3)
	11—15	140(9.8)	223(11.0)	363(10.5)
破瓜期	16—20	316(22.2)	427(21.1)	743(21.5)
青年期	21—25	349(24.5)	472(23.3)	821(23.8)
壯年期	26—30	199(14.0)	314(15.5)	513(14.9)
	31—35	91(6.4)	152(7.5)	243(7.1)
老年期	36—40	44(3.1)	90(4.4)	134(3.9)
	41—45	19(1.3)	43(2.1)	62(1.8)
	46—50	13(1.2)	35(1.7)	48(1.4)
	51以上	22(1.5)	38(1.9)	60(1.7)
	合計	1426	2023	3449

ク、男子 9.8%、女子 11.0%ニシテ女子罹患率多クナルモ、16—20 歳ニ至リテハ男女共ニ著シク増加シ、男子 22.2%、女子 21.1%ニシテ男子ニ再ビ多クナレリ。21—25 歳ニ至リテ男女共ニ最高率ニ達シ、男子 24.5%、女子 23.3

%ナルモ、ソレヨリハ加齡ト共ニ比率次第ニ下降シ、26—30 歳男子 14.0%、女子 15.5%トナリ、漸次高年ニ進ムニ從ヒ男女共ニ略々同曲線ヲ以テ減少スルモ、女子ハ男子ヨリ罹患率僅カニ高シ。即チ、31—35 歳、男子 6.4%、女子 7.5%、36—40 歳、男子 3.1%、女子 4.4%、41 歳以上一テハ男子 4.0%、女子 5.7%ナリ。今、ソノ増減ノ曲線ヲ示セバ第 1 圖ノ如シ。之レ要スルニ、各年齢期ニ於ケル男女罹患比率ハ略々同様ニ進退シ、何レモ青年期(16—25 歳)ニ於テ高率ニ達シ、ソノ前後ニ於テ著シク減少スルモ、尙幼年期(6—10 歳)ニ於テ比較的好發

第 1 圖 年齢性別トノ關係



第 4 表 全結核死亡年齢ト頸腺結核年齢比較

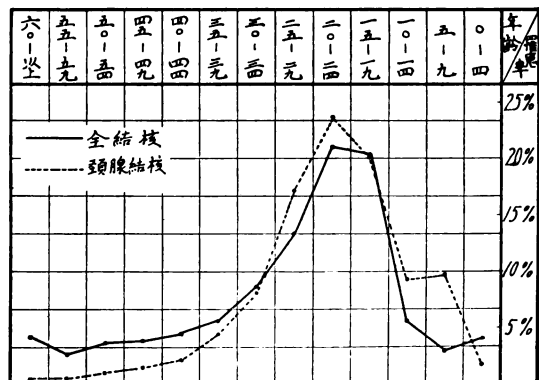
年 齡	昭和 6 年度全結核死亡統計 (内務省)			頸 腺 結 核 罹 患 年 齡		
	男 (%)	女 (%)	合計 (%)	男 (%)	女 (%)	合計 (%)
0—4	2565 (4.2)	2333 (3.8)	4898 (4.1)	39 (2.7)	23 (1.1)	62 (1.8)
5—9	1666 (2.7)	2026 (3.3)	3692 (3.0)	159 (11.2)	178 (8.8)	337 (9.8)
10—14	2067 (3.4)	4553 (7.5)	6620 (5.4)	143 (10.0)	176 (8.7)	319 (9.2)
15—19	10583 (17.3)	14078 (23.2)	24661 (20.2)	276 (19.4)	414 (20.5)	690 (20.0)
20—24	13032 (21.3)	12527 (20.6)	25559 (21.0)	360 (25.2)	461 (22.8)	821 (23.8)
25—29	8253 (13.5)	7762 (12.8)	16015 (13.1)	232 (16.3)	359 (17.7)	591 (17.1)
30—34	5561 (9.1)	4954 (8.2)	10515 (8.6)	104 (7.3)	177 (8.7)	281 (8.1)
35—39	3763 (6.1)	3223 (5.3)	6986 (5.7)	49 (3.4)	106 (5.2)	155 (4.5)
40—44	3119 (5.1)	2400 (4.0)	5519 (4.5)	27 (1.9)	48 (2.4)	75 (2.2)
45—49	2800 (4.6)	1887 (3.1)	4687 (3.8)	12 (0.8)	38 (1.9)	50 (1.4)
50—54	2608 (4.3)	1750 (2.9)	4358 (3.6)	11 (0.8)	23 (1.1)	34 (1.0)
55—59	2098 (3.4)	1278 (2.1)	3377 (2.8)	7 (0.5)	9 (0.4)	16 (0.5)
60—以上	3080 (5.0)	1905 (3.1)	4986 (4.1)	7 (0.5)	11 (0.5)	18 (0.5)
合 計	61195 (50.2)	60678 (49.8)	121873	1426 (41.3)	2023 (58.7)	3449

スルモノナリ。

而シテ、余ノ頸腺結核罹患年齢ト内務省昭和 6 年度全結核死亡年齢トヲ比較スルニ (第 4 表及ビ第 2 圖参照)、略々曲率ヲ同ジクスルガ唯、5—9 歳ニ於テ頸腺結核罹患率ハ多く、9.8%ヲ示スモ全結核死亡率ハ 3.0%ナリ。而シテ、20—24 歳ニ於テ何レモ最高率ニ達シ、頸腺結核ハ 23.8%、全結核ハ 21.0%トナリ、30 歳以後一ハ頸腺罹患率ハ全結核死亡率ニ比シテ稍々減少スルモノナリ。

即チ、全結核死ト頸腺結核罹患トハ最高率年齢

第 2 圖 全結核死亡年齢ト頸腺結核罹患年齢トノ比較



(20—24 歳)ヲ同ジクスルモ、頸腺結核ハ更ニ幼年(5—9 歳)ニ好シテ現ルコトヲ知ルベシ。

第三章 頸腺結核ノ罹患状況

一、罹患側ニ就テ

頸腺結核罹患側ノ報告ハ尠カラザルモ、性並ニ年齢トノ關係ヲ觀察セシモノ無シトス。

今、邦人諸家ノ患側報告ハ第 5 表ノ如ク、三輪、飯森ハ兩側罹患ハ左右各側罹患ヨリ少シト謂ヘルモ、之レニ反シテ、肥田、服部、池田、鳥居、三矢、金澤、白井・平野ハ兩側罹患ガ最も多シト説キ、殊ニ肥田ニハソノ差異甚ダシク、兩側罹患ハ右側罹患ノ約 10 倍、左側罹患ノ約 9 倍ヲ示セリ。

第 5 表 邦人諸家報告ノ罹患側

報告者	報告數	右側(%)	左側(%)	兩側(%)
三輪	56	20(35.7)	24(42.9)	12(21.4)
飯森	80	31(38.6)	25(31.3)	24(30.0)
肥田	100	8(8.0)	9(9.0)	83(83.0)
服部	208	58(27.9)	53(25.5)	97(46.6)
池田	95	16(16.8)	16(16.8)	63(66.3)
鳥居	329	83(25.2)	83(25.2)	163(49.5)
三矢	88	21(23.9)	23(26.1)	44(50.0)
金澤	172	43(25.0)	32(18.6)	97(56.4)
白井・平野	375	127(33.9)	111(29.6)	137(36.6)
福岡	3449	798(23.1)	765(22.2)	1886(54.7)
合計	4952	1205(24.3)	1141(23.0)	2606(52.6)

余ノ 3449 例ノ内、兩側罹患 1886 例 54.07%、右側罹患 798 例 23.1%、左側罹患 765 例 22.2%ニシテ、兩側罹患ハ半数以上ヲ占メ、左右側ハ略々同率ナリキ。

今、文獻報告數ト余ノ調査例トヲ合算スレバ、總計 4952 例ノ内兩患側 2606 例 52.6%、右患側 1205 例 24.3%、左患側 1141 例 23.0%トナレリ。

即チ、頸腺結核ハ兩側ヲ侵スモノ多シ。然レ共、兩側罹患側ニ於テ、發病當初ヨリ同時ニ兩側ヲ侵シタルモノ多キカ、果、又一側ニ罹患シ、逐次他側ニモ發生シタルモノナランカヲ追及スルハ興味アルコトナリ。余ノ兩側罹患側 1886 例ノ内、發病當時ヨリ、ソノ經過ヲ明知シタル

325 例ニ於テ、兩側同時罹患 116 例 35.7%、一側ニ罹患シ引續キ他側ニ發生セシモノ 209 例 64.3%アリタル事實ヨリ見ルモ、頸腺結核ハ扁側ヨリ他側ニ及ボスモノガ通常ニシテ、偶々患者ガ兩側罹患ヲ同時ニ發見シタリト謂ヘルモノ全兩側罹患側ノ約 3 分ノ 1 相當セルガ、果シテ、真ニ同時ニ發生セシモノカ、或ハ問診ノ際ニ偶然答ヘタルカ容易ニ肯定シ得ズ。故ニ嚴密ニハ尙一層少カルベキモノナリ。即チ、扁側罹患側ト雖モ、日時ノ經過ニヨリ、他側ニモ發生スルコトアルハ明ラカナリ。

又、罹患側ヲ男女別及ビ年齢別ニ觀察シタル余ノ調査ハ第 6 表ノ如シ。男女共ニ、左右各側、兩側ノ何レニモ發生スルガ、兩側罹患ハ男女共ニ扁側發生率ヲ凌駕シ、且、左右側發生ハ略々ソノ率ヲ同ジフセリ。而シテ、男女ヲ比較スルニ兩側ノモノハ男子ニ多ク、扁側ノモノガ女子ニ多キ傾キアルハ、女子ガ男子ニ比較シ、美容上特ニ關心ヲ持ツ爲、腺腫ヲ觸知スルト同時或ハ進行セザル内ニ醫治ヲ乞ヘルモノ多キニ反シ、男子ハ懸念セルコト比較的少ク、兩側ニ迄及ビテ、初メテ受療スルモノ多キ爲ナラン。

年齢上、頸腺結核ハ 1—5 歳ニ於テ發生シ、加齡ト共ニ罹患增加スルモノニシテ、21—25 歳ニ至リ最高ニ達スルモ、ソレヨリハ再ビ減少スルコト既述セシガ、罹患側別ニ於テ、兩側ノモノハ男女共ニ幼年期(1—10 歳)ニ多數ナルガ漸次加齡ト共ニ減少スルモ、扁側ノモノハ之レニ反シテ幼年期ニ少ク、ソレヨリ漸次増加ス。

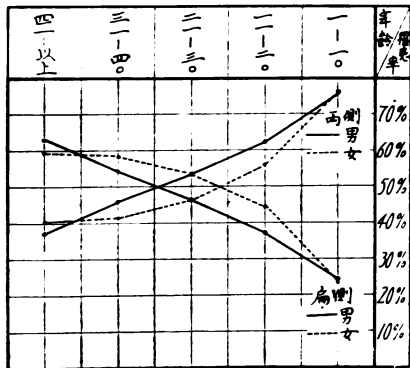
更ニ、男女別ニ於テ、兩側罹患ハ 1—10 歳男子 75.5%、女子 76.0%ノ最高位ヨリ加齡ニ從ヒ男女共ニ發生率ヲ減ジ行クモ、11—20 歳、21—30 歳、31—40 歳期ニ於テハ男子ニ 5 乃至 6%多ク、41 歳以上ニ至リテハ女子ニ稍々多クナリテ、男子 37.0%、女子 40.5%トナレリ。之レニ反シ、扁側ノモノハ幼年期(1—10 歳)ニ男子

第 6 表 罹患側ト性及ビ年齢トノ關係

性別	患側	1—10(%)	11—20(%)	21—30(%)	31—40(%)	41—以上(%)	合計 (%)
男	右側	25(10.7)	100(21.9)	113(20.6)	29(21.5)	15(27.8)	282(19.8)
	左側	32(13.7)	73(16.0)	144(26.3)	44(32.6)	19(35.2)	312(21.9)
	兩側	176(75.5)	283(62.1)	291(53.1)	62(45.9)	20(37.0)	832(58.3)
	合計	233	456	548	135	54	1426
女	右側	28(12.2)	156(24.0)	218(27.7)	77(31.8)	37(31.9)	516(25.5)
	左側	27(11.8)	131(20.2)	199(25.3)	64(26.4)	32(27.6)	453(22.3)
	兩側	174(76.0)	363(55.8)	369(46.9)	101(41.7)	47(40.5)	1054(52.1)
	合計	229	650	786	242	116	2023
男女合計	右側	53(11.5)	256(23.2)	331(24.8)	106(28.1)	52(30.6)	798(23.1)
	左側	59(12.8)	204(18.4)	343(25.7)	108(28.6)	51(30.0)	765(22.2)
	兩側	350(75.8)	646(58.4)	660(49.5)	163(43.2)	67(39.4)	1886(54.7)
	合計	462	1106	1334	377	170	3449

%, 女子 24.0%ニシテ最低ナルモ、漸次加齡ト共ニ増加シ、41 歳以上ニ於テハ男子 63.0%、女子 59.5%ノ最高率ニ達スルモ、11—40 歳ノ各 10 年期ニハ女子ガ男子ヨリモ 5 乃至 6%多シ。此ノ罹患側ノ男女別曲線ヲ描ケバ第 3 圖ノ如ク男子ハ常ニ直線的一、女子ハ弓形ヲ描キ、而カモ兩側、扁側ニ於テ相反シタル弧形ヲ呈セリ。

第 3 圖 男女兩側及ビ扁側罹患年齢比較

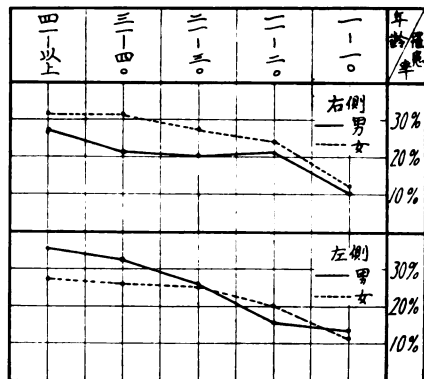


兩側罹患ガ幼年者(1—10 歳)ニ多キハ、該年齢期ニハ保護者ニヨリ初メテ發見セラル、迄ハ放置セラル、場合多ク、自發的ニ治療ヲ受ケザル爲ナランカ、故ニ 10 歳以下ニ於テハ男女同率ナルモ、加齡ト共ニソノ差ハ大トナリ、女子ニ益々減少セルハ、前述セル如ク美容上、男女性質ノ異ナル爲ナリ。然ルニ 41 歳以上ニ至リテハ幼

年期ト同様、男女略々同率トナレルハ、男女ノ美容感ニ著シキ差異ナキ爲ナランカ。

更ニ左側及ビ右側罹患ニ就キテ男女ヲ比較スルニ(第 4 圖参照)、右側ニテハ男女略々同様ノ曲線ヲ描クモ、男子ハ常ニ女子ヨリ低ク、左側ニテハ 11—20 歳ニ於テ男子ハ女子ヨリ低キモ、ソノ他年齢期ニテハ女子ヨリ高シ。然レ共略々男女同様ノ曲線ヲ描クコト右側ノ如シ。即チ、左右側男女年齢別關係ニテハ、何レモ幼年期ニ少ク、加齡ト共ニ増加シ、男女間ニ特別異ナル所見ナシトス。

第 4 圖 男女右側及ビ左側罹患年齢比較



二、頸腺結核ト他部淋巴腺トノ罹患狀況
頸腺結核ハ他淋巴腺、例ヘバ腋窩腺、鼠蹊腺、肘腺、腸間膜腺、股腺ノ結核ヲ合併セル場合屢アリ、殊ニ腋窩腺罹患ノ比較的多キハ、邦人諸

家ノ報告セシ合併淋巴腺結核例ヲ一括シタル成績(第7表參照)ニヨリテモ明ラカニシテ、文獻腋窩腺腫合併ハ1711名ノ内、207名12.1%トナルガ、他腺罹患ハ少ク、肘腺、鼠蹊腺、腸間膜腺、股腺ノ順位トナレリ。

余ノ3449例ニ於テハ腋窩腺、鼠蹊腺ノ腫脹ヲ發見シタルガ他腺ノモノハ1名モナカリキ。即チ、腋窩腺罹患患者190例5.5%アリテ、内、男子61例32.1%、女子129例67.9%ナリ。鼠蹊腺結核罹患ハ18例0.5%アリテ内、男子11

第7表 邦人諸家ノ頸腺結核ニ合併セル他淋巴腺結核

報告者	頸腺結核	腋窩腺(%)	鼠蹊腺(%)	肘腺(%)	腸間膜腺(%)	股腺(%)
佐藤(進)	588	46 (7.8)				1
肥田	100	6 (6.0)			1 (1.0)	
服部	208	40(19.2)			1	1
鳥居	120	23(19.2)		6 (5.0)		
富田・山崎	78	55(70.5)				
林(信雄)	72	4 (5.6)				
金澤	172	14 (8.1)	3 (1.7)			
白井・平野	375	19 (5.1)				
福岡	3449	190 (5.5)	18 (0.5)			
合計	5160	397 (7.7)	21 (0.4)	6 (0.1)	2	2

例61.1%、女子7例38.9%トナレリ。今、邦人諸家報告數ト余ノ調査例トヲ合計スルニ、腋窩腺7.7%、鼠蹊腺0.4%トナリ、ソノ他腺ノ罹患ハ稀有ナリトス。

更ニ、腋窩腺、鼠蹊腺ノ單獨罹患ハ茂木ニ據レバ全淋巴腺結核患者3406名ノ内、腋窩腺193名5.7%、鼠蹊腺70名2.1%、三輪ニハ102名ノ内、腋窩腺20名19.7%、鼠蹊腺4名3.9%、服部ニハ220名ノ内、腋窩腺9名4.1%、鼠蹊腺2名0.9%アリ。余ノ3584名ノ内ニテハ、腋窩腺71名2.0%、鼠蹊腺64名1.8%ニシテ、是等ノ報告例ヲ合算スルニ、7312名ノ内、腋窩腺293名4.0%、鼠蹊腺141名、1.9%トナレリ。之レヲ前述合併腋窩腺7.7%、鼠蹊腺0.4%ニ比較スルニ、腋窩腺ハ少ク、鼠蹊腺ハ多シ。即チ、腋窩腺合併罹患ガ單獨ノ場合ヨリ多キハ該腺腫ガ容易ニ觸知シ、之レヲ頸腺結核診斷ノ際ニ發見シ易キ爲ナリ。

更ニ、頸腺結核側ト腋窩腺患側ニ就キテ、服部ハ頸腺結核ノ扁側乃至兩側罹患ノ別ナク、腋窩腺ニハ右側罹患多シト、余ノ調査ニテハ第8表ノ如ク、頸腺腫ノ患側ハ腋窩ニ於テモ同側ノ場合多ク、右側48.9%、左側51.1%、頸部扁側

ニシテ腋窩兩側ノモノハ少ク、右頸部ノモノニ兩側腋窩罹患17.0%、左頸ノ場合ニハ兩側腋窩罹患19.1%。又、頸部兩側ニシテ腋窩兩側ノモノハ前者ヨリ多ク33.3%ナリ。兩頸部罹患患者ニ扁側腋窩腺腫ヲ伴ヘルモノハ66.7%ニシテ、腋窩右側36.5%、左側30.2%ナリ。

第8表 頸腺結核ニ合併セル腋窩腺結核罹患側

頸腺結核	合併セル腋窩腺結核(%)
右側 (47)	右側 23 (48.9%)
	左側 16 (34.0%)
	兩側 8 (17.0%)
左側 (47)	右側 14 (29.8%)
	左側 24 (51.1%)
	兩側 9 (19.1%)
兩側 (96)	右側 35 (36.5%)
	左側 29 (30.2%)
	兩側 32 (33.3%)
合計 (190)	右側 72 (37.9%)
	左側 69 (36.3%)
	兩側 49 (25.8%)

即チ、頸部扁側罹患ニハ同側腋窩合併多ク、又、頸部兩側罹患ニハ腋窩兩側合併ヲ多シトス。鼠蹊腺合併者18名ニテハ、右側罹患6名、左側罹患5名、兩側罹患7名ニシテ、之レト頸

部罹患側トノ間ハ必ずシモ一定ノ關係ナカリキ。

之レヲ要スルニ頸部患側ト腋窩部患側トノ間ニハ一定ノ關係アリシモ、頸部患側ト鼠蹊部患側トニハ之レヲ認メザリキ。

三、發生部位ニ就テ

頸腺結核ノ發生部位ニ就キ、服部、鳥居ハ側頸腺、下顎腺、頤下腺、後頭腺、耳下腺、耳後腺、胸骨上腺ニ區別シ、更ニ側頸腺ヲ深在、淺在ニ分チ、又、富田・山崎、林(信雄)ハ單ニ側頸腺、下顎腺、鎖骨上窩ノ三部ニ分テリ。而シテ第9表ノ如ク、何レモ側頸部ノモノガ大多數ヲ占メ、下顎部ノモノ之レニ次ギ、ソノ他部位ノモノハ必ずシモ一定セズト。

余ハ之レヲ側頸部、顎下部、耳下部、鎖骨上窩部ニ四別シ、同一患者ニシテ各部位ニ併發セル

第9表 邦人諸家ノ頸腺結核發生部位

報告者	服部 %	鳥居 %	富田 %	林(信雄) %	福岡 %	
側頸部	深上頸	76.1	75.0	61.9	76.4	76.7
	深下頸	20.5	73.3			
	淺頸	81.8	73.3			
下顎腺	29.0	52.5	54.8	15.3	56.3	
鎖骨上窩腺			22.6	2.8	17.5	
耳下腺		1.7			20.0	
耳後腺	0.6					
頤下腺	9.1	10.8				
後頭腺	1.1	0.8				
胸骨上腺	3.4					
淺在頤面腺	0.6					
(腋窩腺)			72.6	(5.6)		
調査人員	176名	120名	84名	72名	3329名	

モノハ延數ニ換算シテ性別及ビ、年齢上ヨリ調査セシニ第10表ニ示ス如ク、男女共ニ側頸部ノ

第10表 頸腺結核ノ發生部位ト性及ビ年齢トノ關係

性	發生部位	1-10(%)	11-20(%)	21-30(%)	31-40(%)	41-以上(%)	合計(%)	人員ニ對スル(%)
男	側頸部	198(44.8)	341(42.0)	358(43.5)	85(41.3)	30(39.0)	1012(42.9)	1012(73.5)
	顎下部	144(32.6)	277(34.2)	283(34.4)	77(37.4)	29(37.7)	810(34.3)	810(58.9)
	耳下部	54(12.2)	122(15.0)	91(11.1)	18(8.7)	5(6.5)	290(12.3)	290(21.1)
	鎖骨上窩部	46(10.4)	71(8.8)	91(11.1)	26(12.6)	13(16.9)	247(10.5)	247(18.0)
	合計	442	811	823	206	77	2359	1376名
女	側頸部	204(43.2)	510(44.1)	57(49.7)	174(49.0)	80(43.5)	1540(46.4)	1540(78.9)
	顎下部	185(39.2)	386(33.4)	343(29.8)	97(27.3)	54(29.3)	1065(32.1)	1065(54.5)
	耳下部	54(11.4)	148(12.8)	116(10.1)	41(11.5)	18(9.8)	377(11.4)	377(19.3)
	鎖骨上窩部	29(6.1)	112(9.7)	119(10.3)	43(12.1)	32(17.4)	335(10.1)	335(17.2)
	合計	472	1156	1150	355	184	3317	1953名
男女合計	側頸部	402(44.0)	851(43.3)	930(47.1)	259(46.2)	110(42.1)	2552(45.0)	2552(76.7)
	顎下部	329(36.0)	663(33.7)	626(31.7)	174(31.0)	83(31.8)	1875(33.0)	1875(56.3)
	耳下部	108(11.8)	270(13.7)	207(10.5)	59(10.5)	23(8.8)	667(11.8)	667(20.0)
	鎖骨上窩部	75(8.2)	183(9.3)	210(10.6)	69(12.3)	45(17.2)	582(10.3)	582(17.5)
	合計	914	1967	1973	561	261	5676	3329名

モノガ大多數ヲ占メ、顎下部、耳下部、鎖骨上窩部ノ順位ニ減少セリ。而シテ女子ニハ男子ヨリモ側頸部ノモノ多ク、ソノ他ノモノハ男子ニ多カリキ。

又、各年齢ヲ通ジ、側頸部ハ他部ヨリ多ク、最高率21-30歳47.1%ニシテ、31-40歳46.2%、1-10歳44.0%、11-20歳43.3%、最低

41歳以上42.1%トナリ年齢別ノ動搖ハ少シトス。顎下部ニテハ1-10歳36.0%、11-20歳33.7%、21歳以上ニ達スレバ何レモ31%ヲ上下スルノミ。耳下部ニテハ最高11-20歳13.7%ヨリ1-10歳11.8%、21-30歳及ビ31-40歳10.5%、41歳以上最低8.8%ノ順位トナリ、鎖骨上窩部ハ最低1-10歳8.2%ヨリ加齡ト共

ニ徐々ニ増加シ41歳以上17.2%ノ最高トナレリ。

更ニ、罹患年齢ヲ男女別ニ觀察スルニ側頸部ノモノハ男子ニ於テ、各年齢期ノ差異少ク凡ソ42%前後ヲ示セルモ、女子ニテハ21-30歳、31-40歳ニ罹患率高ク49%強ニシテ、ソノ他ノ年齢期ニハ何レモ44%前後ナリ。顎下部ハ男子1-10歳32.6%ノ最低ヨリ加齡ト共ニ徐々ニ増加シ41歳以上37.7%トナリ、女子ハ之レニ反シテ1-10歳最高39.2%ナルモ加齡ト共ニ減少シ31-40歳27.3%トナルガ41歳以上一ハ再ビ僅カニ増加シ、29.3%トナレリ。耳下部ハ男子11-20歳15.0%ニシテ最高ヲ示シ、41歳以上ハ最低6.5%、他ノ年齢期ハ凡ソ10%前後ナルモ、女子ニテハ各年齢期ノ差異少ク何レモ11%前後ヲ示セリ。鎖骨上窩部ハ男子11-20歳8.8%最低、次位1-10歳10.4%、21歳以上ハ加齡ト共ニ増加シ最高41歳以上16.9%ニ達スルモ、女子ハ1-10歳最低6.1%ニシテ加齡ニ從ヒ増加シ41歳以上最高17.4%トナレリ。

即チ、頸腺結核年齢別ヨリ部位的發生ヲ見ルニ鎖骨上窩部ハ男女共ニ高齢ニ進ムニ從ヒテ漸次増加シ、顎下部ハ男子ニテハ幼年者ニ少ク加齡ト共ニ増加セルモ、女子ハ之レニ反シテ年少者ニ多ク、ソレヨリ漸次減少シ、側頸部、耳下部ノモノニハ男女別ナク年齢上一ハ一定ノ關係ヲ認ムルコト少シ。

頸腺結核ハ既述ノ如ク頸部ノ各部ニ發生スルガ好發部ヲ調査セントシ、第11表ノ如ク其發生部ノ取合セテ11別トシテ之レヲ觀ルニ、側頸部ト顎下部併發ノモノガ最モ多ク29.3%ヲ占ムルモ、ソノ他ハ4%以下ニシテ、殊ニ耳下部ト鎖骨上窩部併發ハ極メテ稀レニシテ0.8%ニ過ギザリキ。而シテ側頸部ニ他部位ノ併發スルモノ、數多キヲ見ルベシ。又、取合セ罹患率ニハ男女ノ差異何レモ少ナカリキ。

而シテ更ニ、單發ノミニ就キテ發生部位ヲ調査スルニ、第12表ノ如ク、側頸部29.6%、顎下

第11表 頸腺結核ノ發生部位
(各部位ニ併發ノモノ)

發生部位	男子(%)	女子(%)	合計(%)
側頸部	395(28.7)	579(29.6)	974(29.3)
顎下部	53(3.9)	89(4.6)	142(4.3)
側頸部、顎下部、耳下部	60(4.4)	75(3.8)	135(4.1)
顎下部	48(3.5)	71(3.6)	119(3.6)
側頸部、耳下部、鎖骨上窩部	39(2.8)	56(2.9)	95(2.9)
側頸部、耳下部	32(2.3)	49(2.5)	81(2.4)
側頸部、顎下部、鎖骨上窩部	35(2.5)	40(2.0)	75(2.3)
顎下部、耳下部、鎖骨上窩部	32(2.3)	41(2.1)	73(2.2)
側頸部、耳下部、顎下部、鎖骨上窩部	30(2.2)	36(1.8)	66(2.0)
顎下部、鎖骨上窩部	20(1.5)	29(1.5)	49(1.5)
耳下部、鎖骨上窩部	13(0.9)	15(0.8)	28(0.8)
合計	755(55.0)	1080(55.3)	1837(55.2)
調査人員	1376	1953	3329

第12表 頸腺結核ノ發生部位
(同一部位ニ發生ノモノ)

發生部位	男子(%)	女子(%)	合計(%)
側頸部	368(26.7)	616(31.5)	984(29.6)
顎下部	190(13.8)	194(9.9)	384(11.5)
耳下部	36(2.6)	34(1.7)	70(2.1)
鎖骨上窩部	25(1.8)	29(1.5)	54(1.6)
合計	619(45.0)	873(44.7)	1492(44.8)
調査人員	1376	1953	3329

部11.5%、耳下部2.1%、鎖骨上窩部1.6%ノ順位トナリテ側頸部ガ多シトス。而シテ女子ハ男子ヨリ側頸部發生多キモ、ソノ他部位ニハ女子ヨリモ男子ニ多カリキ。

余ハ更ニ、第13表ノ如ク發生部ト罹患側ニ就キテ觀ルニ、同一部位發生ニ於テ、一側患49.5%、兩側患50.5%ニシテ兩者ノ差異少ナク、又、男子ニハ一側患ヨリ兩側患多キモ、女子ハ

第 13 表 發生部位ト罹患側トノ關係

發生部位	患側	男子(%)	女子(%)	合計(%)
同一部位ニ發生セルモノ	一側	294(47.5)	445(51.0)	739(49.5)
	兩側	325(52.5)	428(49.0)	753(50.5)
	合計	619	873	1492
各部位ニ併發セルモノ	一側	281(37.1)	492(45.6)	773(42.1)
	兩側	476(62.9)	588(54.4)	1064(57.9)
	合計	757	1080	1837
合計		1376	1953	3329

之レニ反セリ。各部位併發ニ於テハ一側患 42.1%、兩側患 57.9%トナリ兩側發生ニ多クシテ、ソノ差ハ男子ニ女子ヨリ多シ。

即チ、頸腺結核ハ一側一部位ニ發生スルモノト、兩側同一部位ニ對象ニ發生スルモノトハ略々同

率ナルモ、一側各部併發ヨリハ兩側各部併發ノモノ多カリキ。

而シテ、同部位發生 44.8%、各部位發生 55.2%ニシテ後者ニ多ク、之レヲ諸家報告ニ見ルニ、服部ハ同一部位 20.5%、各部位 79.5%、富田・山崎ハ同一部位 22.6%、各部位 77.4%ニシテ、兩報告ニ於テモ、各部位發生ノモノ多キヲ示セリ。

即チ、頸腺結核ハ男女、年齢ヲ問ハズ何レノ部位、又左右各側ニ生ジ、發生部位ノ合成モ多様ナルガ、是等ノ間ニハ既述ノ如キ一定ノ關係アルモノナリ。

第四章 頸腺結核ノ性狀

頸腺結核ノ臨牀上所見ハ、ソノ經過ニヨリ一樣ナラザルモ、便宜上、次ノ諸點ヲ選ビテ記載セントス。

一、頸腺結核ノ所見ハ既ニ先人記載ノ如ク、腺塊ノ單獨ニシテ大ナルモノアリ、小ナルモノアリ。或ハ島嶼狀ニ 2, 3 又ハ 4, 5 個散佈スルモノアリ、或ハ多數聚生シテ念珠狀ニ或ハ塊積狀ヲ呈スルモノアルガ、之レヲ散佈ノ狀況ヨリ單獨、散在、簇生ニ大別シ得ベシ。而シテソノ分佈狀況ニ就キ、林(信雄)ハ單獨、散在ノモノ併セテ 51.4%、簇生(氏ハ珠數狀、塊疊狀トス)ノ

モノ 41.7%ヲ、白井・平野兩氏ハ單獨 21.7%、散在(2—3 個) 13.8%、簇生 64.5%ヲ、服部ハ單獨(1—3 個)ノモノ 34.7% 散在(4—10 個)ノモノ 59.7%、簇生ノモノ 4.5%ヲ算シ、林、白井・平野ハ簇生ノモノ多シト謂ヒ、服部ハ散在ノモノ多シトセリ。

余ノ調査ニテハ第 14 表ノ如ク散在ノモノ 57.6%ニシテ最モ多ク、簇生 24.1%、單獨 18.4%ノ順位ニ減少セリ。而シテ單獨ノモノハ女子ニ多ク、散在ノモノハ男子ニ多キモ、簇生ノモノハ男女全ク同率ナリキ。

第 14 表 頸腺結核分佈狀況ト性及ビ年齢トノ關係

性	分佈狀況	1—10(%)	11—20(%)	21—30(%)	31—40(%)	41—以上(%)	合計(%)
男	單獨	30(12.9)	54(11.8)	80(14.6)	31(23.0)	10(18.5)	205(14.4)
	散在	173(74.2)	278(61.0)	331(60.4)	72(53.3)	24(44.4)	878(61.6)
	簇生	30(12.9)	124(27.2)	137(25.0)	32(23.7)	20(37.0)	343(24.1)
	合計	233	456	548	135	54	1426
女	單獨	41(19.2)	127(19.5)	177(22.5)	52(21.5)	28(24.1)	428(21.2)
	散在	152(66.4)	327(50.3)	441(56.1)	134(55.4)	53(45.7)	1107(54.7)
	簇生	33(14.4)	196(30.2)	168(21.4)	56(23.1)	35(30.3)	488(24.1)
	合計	229	650	786	242	116	2023
男女合計	單獨	74(16.0)	181(16.4)	257(19.3)	83(22.0)	38(22.4)	633(18.4)
	散在	325(70.3)	605(54.7)	772(57.9)	206(54.6)	77(45.3)	1985(57.6)
	簇生	63(13.6)	320(28.9)	305(22.9)	88(23.3)	55(32.4)	831(24.1)
	合計	462	1106	1334	377	170	3449

年齢別ニ據ルニ單獨ノモノハ1—10歳16.0%ノ最小率ヨリ加齡ト共ニ徐々ニ増加シテ41歳以上22.4%最高ニ達スルモ、ソノ間ニ於ケル年齢動搖ハ少シトス。散在ノモノハ之レニ反シテ1—10歳70.3%最高率ニシテ、11—20歳、21—30歳、31—40歳ハ何レモ略々同率ニシテ56%前後ヲ示シ、41歳以上ニ至レバ最低45.3%トナレリ。簇生ノモノハ最高率41歳以上32.4%ニシテ11—20歳28.9%、31—40歳23.3%、21—30歳22.9%ノ順位トナリ最低率1—10歳13.6%ナリキ。

更ニ、罹患年齢ヲ男女別ニ觀察スルニ、單獨ノモノハ男子31—40歳最高23.0%、41歳以上18.5%之レニ次グガ、1—30歳ノ各10年期ハ略々同率13%前後ナリ、女子ニハ1—10歳最低19.2%ヨリ加齡ト共ニ徐々ニ増加シ41歳以上24.1%最高ナルモ一般ニ年齢的動搖少シ。散在ノモノハ男子1—10歳最高74.2%ニシテ加齡ト共ニ減少シ41歳以上最低44.4%ニ達スルモ、女子ハ1—10歳最高66.4%、21—30歳及ビ31—40歳略々同率ニシテ56%前後、11—20歳50.3%、41歳以上45.7%ノ順位ナリ。簇生ノモノハ男子1—10歳最低12.9%ニシテ、11—40歳各年齢期略々同率25%前後、41歳以上37.9%ニ達シ、女子ハ1—10歳最低14.4%、21—40歳各年齢期略々同率22%前後、11—20歳及ビ41歳以上30%強ニ達ス。

即チ、頸腺結核ノ分佈狀況ヲ見ルニ、單獨ノモノヨリ2個以上ノモノガ多ク、或ハ集積シ、或ハ團塊、或ハ散在シ、之レヲ性別、年齢上ヨリ、單獨ノモノハ女子ニ多ク、且ツ、年長者ニ罹患率高キモ、散在ノモノハ之レニ反シテ男子ニ比較的多ク、加之、年少者ニ多シ。簇生ノモノハ男女略々同率ニシテ年齢トハ一定ノ關係ナシ。然レ共、頸腺腫ノ發育ハ、ソノ經過ト共ニ變化スルコトアリテ、群別ヲ立テ、ソノ多寡ヲ判定シタルモ、診斷當時ノ狀況ヲ精示シタルニ過ギズ。

二、腺塊ノ性状ハ、陳舊、或ハ經過ノ長短ニヨ

リ腺質ガ硬化(増殖性)、又ハ軟化(乾酪性及ビ化膿性)シ、或ハ潰瘍及ビ瘻孔形成スルコトアレバ、一割ニソノ性状ヲ區別スルハ必ズシモ至當ナラザルガ、假リニ Kienböck 及ビ Baisch 兩氏ノ分類ニ從ヒ、第一類(増殖性—硬韌—可動)、第二類(乾酪化乃至化膿性—柔軟—癒着)、第三類(潰瘍性及ビ有瘻性)ニ分チテ臨牀上觀察ヲ下スニ、第15表ノ如ク、藤浪・山田、肥田、飯森、川瀬、三矢、金澤ハ第一類60乃至70%、第二類20乃至25%、第三類10乃至15%ノ順位トシ、服部ハ第一類48.6%、第二類29.7%、第三類21.6%。池田ハ第一類73.7%、第三類17.9%、第二類8.4%ノ順位ヲ示シ、佐藤ハ第一類、及ビ第二類約47%、白井・平野ハ第一類、第二類約43%ノ同率ヲ、而シテ第三類ハ何レモ之レヨリ小トセリ。今、是等ノ報告數ヲ合計スルニ、2106例ノ内、第一類1170例55.6%、第二類746例35.4%、第三類190例9.0%トナレリ。

第 15 表 邦人諸家ノ性質類別表

報告者	第一類(%)	第二類(%)	第三類(%)	合計
藤浪・山田	40(65.6)	20(32.8)	1(1.6)	61
服部	18(48.6)	11(29.7)	8(21.6)	37
肥田	196(78.4)	33(13.2)	21(8.4)	250
飯森	45(57.0)	23(29.1)	11(13.9)	79
佐藤(銀一)	430(47.6)	428(47.4)	45(5.0)	903
池田	70(73.7)	8(8.4)	17(17.9)	95
川瀬	25(65.8)	8(21.1)	5(13.2)	38
三矢	49(65.3)	15(20.0)	11(14.7)	75
金澤	118(68.6)	31(18.0)	23(13.4)	172
白井・平野	179(45.2)	169(42.7)	48(12.1)	396
福岡	2387(72.6)	621(18.9)	282(8.6)	3290
合計	3557(65.9)	1367(25.3)	472(8.7)	5396

更ニ余ノ3290例ニテモ、第一類72.6%、第二類18.9%、第三類8.6%ノ順位トナリ、第一類ノ多キハ蓋シ患者ガ早く注意シテ悪化セザル内ニ醫治ヲ乞フモノ多キニ由ルモノニシテ腺腫ノ増悪(化膿)セルモノハ本症ノ末期ニ屬シ少數トナリ、殊ニ作癢、潰瘍形成スルモノニ至リテハ更ニ僅少トナル事當然ナリ。

第 16 表 頸腺結核ノ性質ト性及ビ年齢トノ關係

性	性質	1—10(%)	11—20(%)	21—30(%)	31—40(%)	41以上(%)	合計(%)
男	第一類	158(71.2)	296(68.0)	343(64.8)	86(68.3)	34(65.4)	917(67.2)
	第二類	46(20.7)	94(21.6)	130(24.6)	27(21.4)	11(21.2)	308(22.6)
	第三類	18(8.1)	45(10.3)	56(10.6)	13(10.3)	7(13.5)	139(10.2)
	合計	222	435	529	126	52	1364
女	第一類	176(79.6)	459(74.5)	572(77.2)	181(77.7)	82(71.3)	1470(76.3)
	第二類	35(15.8)	101(16.4)	123(16.6)	34(14.6)	20(17.4)	313(16.3)
	第三類	10(4.5)	56(9.1)	46(6.2)	18(7.7)	13(11.3)	143(7.4)
	合計	221	616	741	233	115	1926
男女合計	第一類	334(75.4)	755(71.8)	915(72.0)	267(74.4)	116(69.5)	2387(72.6)
	第二類	81(18.3)	195(18.6)	253(19.9)	61(17.0)	31(18.6)	621(18.9)
	第三類	28(6.3)	101(9.6)	102(8.0)	31(8.6)	20(12.0)	282(8.6)
	合計	443	1051	1270	359	167	3290

此ノ三類ノ男女別罹患ハ第 16 表ノ如ク、第一類ハ男子 67.2%、女子 76.3%ニシテ女子ニ多ク第二類男子 22.6%、女子 16.3%、及ビ第三類男子 10.2%、女子 7.4%トナリ男子ニ多シ。之レ女子が美容上、男子ヨリ初期ニ治療ヲ求ムルモノ多キダケ、第二類、第三類ニ少キ所以ナリ。

又、年齢上ヨリハ、第一類ハ男女共ニ各年齢期ニ大差ナク、凡ソ 69%乃至 75%ノ間ヲ昇降スルモ、1—10 歳ノ幼年期ニ比較的多ク、第二類モ亦男女共、年齢別ニ高低ナク、略々 18%ヲ前後ス。第三類モ性別ナク、年齢上同様ノ成績ヲ示セルガ、第一類ハ幼年者ニ、第三類ハ高年者ニ好發スル傾向アルモノナリ。

第五章 頸腺結核ト他疾患トノ關係

頸腺結核ノ研究多キモ、患者ノ既往疾患ニ注意ヲ拂ヒタルモノハ鳥居、白井・平野ノミニシテ(第 17 表参照)、鳥居ハ 120 名ノ内、既往歴ナキモノ及ビ既往歴アルモノ非結核性ノモノ合計 87 名 72.6%、結核性ノモノ 33 名 27.4%(氏ハ頸腺

結核 7 名、虛弱 18 名ヲ加ヘテ 58 名トス)、コノ内、呼吸器結核最モ多ク、26 名 78.8%ニ當リ、就中肋膜炎ハ 16 名 61.5%ヲ占ムト。白井・平野ハ 432 名ノ内、非結核性既往者 306 名 70.8%結核性既往者 126 名 29.2%アリ、内、呼吸器結

第 17 表 邦人諸家報告ノ頸腺結核患者既往症

既往疾患	鳥居	白井・平野	福岡			
			男(%)	女(%)	合計(%)	
呼吸器結核	肋膜炎	16(13.3)	73(16.9)	103(14.8)	114(10.9)	217(12.5)
	肺結核	6(5.0)	22(5.1)	43(6.2)	49(4.7)	92(5.3)
	ソノ他	4(3.3)	1(0.2)	7(1.0)	8(0.7)	15(0.8)
消化器結核	3(2.5)	18(4.2)	27(3.9)	35(3.3)	62(3.6)	
泌尿器結核			13(1.9)	9(0.9)	22(1.3)	
外科結核	4(3.3)	12(2.8)	23(3.3)	38(3.6)	61(3.5)	
非結核性疾患	87(72.6)	306(70.8)	197(28.4)	269(25.7)	466(26.8)	
無			281(40.5)	524(50.1)	805(46.3)	
合計	120	432	694	1046	1740	

核 96 名 76.2%ニシテ、就中、肋膜炎 78 名 76.0%ニ達セリト。

余ハ 1740 名ノ既往症ヲ調査シタルニ 健在ノモノ 805 名 46.3%、既往症アリシモノ 935 名 53.7%ナリ。内、非結核性疾患 466 名 49.8%、結核性ノモノ 469 名 50.2%ニシテ、更ニ、ソノ内ニハ呼吸器結核最多 324 名 69.1%、就中、肋膜炎 217 名 67.0%、肺結核 92 名 28.4%ナリ。ソノ他、消化器結核 62 名 13.2%、泌尿器結核 22 名 4.7%、外科結核 61 名 13.0%アリキ。

即チ、鳥居、白井・平野及ビ余ノ調査ニ於テ知ル如ク、頸腺結核ノ既往歴ニハ健康乃至非結核性疾患者多ク、72.6%ヲ占メ、結核性疾患罹患者 27.4%ニシテ、ソノ内、呼吸器結核 71.0%、消化器結核 13.2%、外科結核 12.3%、泌尿器結核 3.5%ノ順位トナリ。呼吸器結核ノ内ニハ肋膜炎 68.6%、肺結核 26.9%、ソノ他 4.5%ナリキ。

更ニ、頸腺結核患者ノ他結核症合併ノ有無ニ就キ(第 18 表参照)、佐藤(銀一)、三輪、肥田ハ無結核合併 81%以上、結核合併 19%前後ニシテ、佐藤ハソノ内、肺結核 73.8%ニシテ多ク、消化器 8.3%、泌尿器 8.6%、外科結核 14.3%ナリトシ、三輪ハ肺結核 40.0%、及ビ外科結核 40.0%同率ニシテ、ソノ他ハ 20.0%。肥田ハ外科結核 58.8%、肺尖浸潤 29.4%、肺結核 11.8%ヲ擧ゲリ。林(信雄)ハ無結核合併 70.8%、結核合併者 29.2%ノ内、肺結核 47.6%、外科結核 19.0%、ソノ他 14.3%以下ナリト。佐藤(進)ハ無結核合併 66.0%、結核合併 34.0%、ソノ内、肺尖加答兒 45.5%、肺結核 16.0%、外科結核 34.5%、ソノ他 4.0%ナリ。服部ハ結核性合併者 55.7%、ソノ内、肺結核 24.7%、肋膜炎 12.9%、外科結核 56.5%、ソノ他 5.9%ヲ擧ゲタリ。

以上ハ何レモ一般臨牀上所見ナルガ、鳥居ハ臨

第 18 表 邦人諸家報告ノ頸腺結核患者合併症

合併症	佐藤(進)	三輪	肥田	服部	佐藤(銀一)	鳥居	富田・山崎	林(信雄)	福岡	
呼吸器核	肺結核	32 (5.4)	4 (7.4)	2 (2.0)	21(15.0)	180(12.1)	68(56.6) 38(31.7)	36(42.9)	10(13.9)	86(22.6)
	肋膜炎	2 (0.3)			11 (7.9)		23(19.1) 6 (5.0)	42(50.0)	2 (2.8)	32 (8.4)
	ソノ他	91(15.5)	1 (1.9)	5 (5.0)	1 (0.7)		114(95.0)	30(35.7)	3 (4.2)	23 (6.1)
消化器結核	6 (1.0)	1 (1.9)		3 (2.1)	8 (0.5)			2 (2.8)		
泌尿器結核				1 (0.7)	21 (1.4)					
外科結核	69(11.7)	4 (7.4)	10(10.0)	48(34.3)	35 (2.3)	34(28.3)	55(65.5)	4 (5.6)	23 (6.1)	
結核性合併ナキモノ	388(66.0)	44(81.5)	83(83.0)	62(44.3)	1246(83.6)	42(35.0)	4 (4.8)	51(70.8)	216(56.8)	
合計	588	54	100	140	1490	120	84	72	380	

(淺原氏ハ 69 例ノ内 7 例 (10.1%)ニ肺結核ヲ證セリ。
○印ハ胸廓内「レ」的検査ニ據ルモノニシテ、鳥居ハ臨牀、「レ」的兩検査ヲ爲セリ)

牀上、及ビ「レ」線上ノ兩検査ヲ施シ、臨牀上ニテハ、結核疾患合併者 65.0%ヲ示シ、就中、肺結核 48.7%、胸膜炎後貽症 7.7%、外科結核 43.6%アリ。無結核合併者 35.0%ナルモ、「レ」的ニハ 120 名ノ内、肺結核 56.6%、氣管枝腺結核 95.0%、胸膜炎後貽症 19.1%トナレリ。富田・山崎モ「レ」的檢索ニヨリテ、肋膜炎及ビ同後貽症 50.0%、肺結核 42.9%、肺門腫核及ビ結

核性肺間質増殖 35.7%、腋窩腺結核合併者 65.5%、結核合併ナキモノ 4.8%ト謂ヘリ。

余モ亦、頸腺結核患者 380 名ノ胸廓内「レ」的検査ヲ施行シタルニ(第 19 表参照)、病變アリシモノ 141 名 37.1%、ソノ内、肺結核 86 名 61.0%、肋膜炎及ビ同後貽症 32 名 22.7%、肺門腫脹 23 名 16.3%ナリキ。ソノ他ニ腋窩腺結核 23 名 9.6%ヲ認メタレバ、結核性合併ナキモノハ

第 19 表、頸腺結核患者ノ胸部「レ」の所見

「レ」の診断		症例 (%)	合計 (%)
廣汎性肺結核	滲出型	16 (4.2)	86 (22.6) (肺結核)
	増殖型	23 (6.1)	
	硬變型	5 (1.3)	
	播種型	5 (1.3)	
	混合型	16 (4.2)	
早期浸潤	5 (1.3)		
肺尖結核	10 (2.6)		
肺門結核	6 (1.6)		
肋膜炎及同後胎症	32 (8.4)	55 (14.5)	
肺門腫脹	23 (6.1)		
異常ナキモノ	239 (62.9)	239 (62.9)	
合計	380	380	

216名 56.8%トナレリ。

即チ、「レ」の検索ニ據リタルモノハ(鳥居、富田・川崎、福岡)肺結核 32.3%、肋膜炎及ビ同後胎症 16.6%ニシテ一般臨牀の検査ニ據レル(佐藤(進)、三輪、肥田、服部、佐藤(銀一)、林)肺結核 10.2%、肋膜炎 0.6%ニ比較シ、著シク高率ナリ。之レ「レ」の検索ニヨリ容易ニ病竈ヲ發見シ、殊ニ潜在性肺結核、肋膜炎後胎症等ヲモ證明シ得ルニヨレバナリ。

更ニ、余ノ合併肺結核 86例ニハ廣汎性ノモノ 65例 75.6%アリテ、内、増殖型 35.4%、滲出型及ビ混合型各 24.6%、硬變型及ビ播種型各 7.7%ニシテ、慢性ノ經過ヲ探レルモノ多カリキ。鳥居ハ頸腺結核患者ニ證明セル氣管枝腺結核及ビ肺結核ハ概ネ陳舊性像ヲ呈シ、且ツ、臨牀の徵候輕微ニシテ所謂潜在性結核ト認ムベキモノ多數ナリト謂ヘリ。

以上諸家報告ノ結核性疾患既往ト合併(臨牀の検査ヲ施行セルモノ)トヲ比較觀察スルニ(第 20 表参照)結核疾患ノ罹患率ハ既往、合併何レモ 26%前後ニシテ、内、呼吸器結核最モ多ク、既往 19.5%、合併 15.9%ヲ占メ、就中、肺結核ハ既往 5.2%、合併 11.2%ニシテ、合併者ハ既往ノ 2 倍ヲ示スモ、之レニ反シテ、肋膜炎ハ既往 13.4%、合併 0.8%トナリ、既往ノモノニ遙カニ高率ナルハ言フ迄モナシトス。消化器結

第 20 表 邦人諸家報告ノ既往及ビ合併症比較

病名	既往症 (%)	合併症 (%)
呼吸器結核	肺結核	287 (11.2)
	肋膜炎	21 (0.8)
	ソノ他	101 (3.9)
	消化器結核	20 (0.8)
泌尿器結核	22 (0.9)	22 (0.9)
外科結核	77 (3.4)	204 (8.0)
非結核及ビ無症	1664 (72.6)	1916 (74.8)
合計	2292	2560

核ハ既往 3.6%、合併 0.8%、泌尿器結核ハ既往 1.0%、合併 0.9%ヲ示シ何レモ少ク、外科結核ハ既往 3.4%、合併 8.0%ニシテ合併セルモノ多ク、就中、腋窩腺結核多シトス。鳥居ハ結核性既往アルモノ 33名ノ全數ニ氣管枝腺結核ヲ證明シ、肺結核ハ 19名 57.6%ヲ認メリト。余ハ結核性既往無キモノ 268名ノ内、肺結核 53名 20.0%、結核性既往アルモノ 112名ノ内、肺結核 33名 29.3%ヲ證明セリ。

今、他ノ結核疾患ノ結核性既往症ヲ參酌スルニ、高橋ハ 200名ノ泌尿器結核(主トシテ腎臟結核)患者ノ内、結核性既往症 57.5%アリテ、呼吸器結核ハソノ大半ヲ占メ 93.9%ヲ示シ、ソノ内、肋膜炎 50.0%ナリト。板津ハ脊椎「カリエス」患者 384名ニ於テ結核性既往症 38.2%アリテ、内、呼吸器結核 83.7%。就中、肋膜炎 82.9%ナリト。

即チ、頸腺結核患者ノ結核性既往症ハ他ノ結核性患者、例ヘバ泌尿器結核、及ビ脊椎「カリエス」患者ノ結核性既往症ニ比較シテ遙カニ少シトス。

斯ク、既往症、合併症ヲ臨牀上分チタルモ、果シテ之レヲ區別シ得ルヤ否ヤノ討究ニ就キテハ材料ガ患者ノ申告ニヨリタルニ過ギザレバ、ソノ數字の説明ノ有意義ナルカ疑義ナキニ非ザルモ、茲ニハ一般報告ニ倣フテ調査シタルモノナリ。然レ共、一般ニ或ル臟器結核ハ結核性既往症ヲ有スルモノ多キニ反シ、頸腺結核患者ニハ少キモノニシテ、又、合併症ヲ呈スルコトモ少キモノナルガ、唯、腋窩腺結核ガ比較的の多キコ

トハ特ニ注目スベキ所ナリ。

更ニ、肺結核合併者ノ罹患年齢ニ就キ、烏居ハ頸腺結核患者 120 名ノ内、肺結核罹患患者 68 名 56.6%アリテ、就中、幼年期(1—15 歳)ノモノニハ 21 名ノ内、8 名 44.4%、中年期(16—25 歳)76 名ノ内、48 名 63.1%、成年期(26 歳以上)23 名ノ内、12 名 60.0%ナリ。即チ、中年期ノ罹患率ガ最高ニシテ、成年期、幼年期之レニ次グト謂ヘリ。余ノ頸腺結核患者 380 名ノ内、肺結核罹患患者 86 名ニ於テハ(第 21 表参照)、ソノ罹患率幼年期 15.3%、破瓜期 31.5%、青年期 24.2%、壯年期 23.5%、老年期 9.5%ニシテ、破瓜期ニ最モ多ク、青年期、壯年期、幼年期、老年期ノ順位ヲ示シ、大略、内務省全結核死亡年齢(前述第 4 表参照)ニ順應スルモノナルヲ知レリ。

第 21 表 頸腺結核患者ノ肺結核合併者年齢

年 齢	男子	女子	合計	肺結核合併者 (%)
1—15(幼年期)	52	46	98	15(15.3)
16—20(破瓜期)	40	49	89	28(31.5)
21—25(青年期)	40	51	91	22(24.2)
26—40(壯年期)	37	44	81	19(23.5)
41以上(老年期)	9	12	21	2(9.5)
合 計	178	202	380	86(22.6)

頸腺結核患側ト肺結核病竈側ニ就キ、富田・山崎ハ「レ」的検査ニ依リ肺結核合併者 55 例ノ内、右肺患 24 例、左肺患 6 例、兩肺患 25 例アリテ、頸腺結核罹患側ト特殊ノ關係ナク、一般ニ肺結核ノ變化廣汎ナル程、頸部淋巴腺ノ罹患範圍ヲ増シ、肺結核限局セルモノニハ頸部淋巴腺ヲ侵スコト少シト。烏居ハ頸腺結核ニ於ケル肺結核ハ、腺腫ノ種類及ビ患側ノ如何ニ拘ラズ、肺右側ヲ侵襲スルモノ多ク、鎖骨上窩腺結核ノモノニハ患側ニ關係ナク 氣管枝腺結核ハ兩側ニ多ク、肺結核ハ右側ニ多キモ、胸膜炎後胎症ハ獨リ鎖骨上窩腺ト概ネ患側ヲ同フスルモノニシテ結核性胸膜炎ニ續發セル鎖骨上窩腺結核ヲ想像シ得ルト謂ヘリ。今、余ノ肺結核合併者 86 例ニ於テ(第 22 表参照)、右肺患 22 例、左肺患 17 例、兩肺患 47 例ニシテ、頸腺腫ノ扁側、兩側ニ

第 22 表 頸腺結核ニ合併セル肺結核病竈側

頸腺結核	合併セル肺結核病竈(%)	
	右側	左側
右側 (20)	右側	5 (25.0%)
	左側	2 (10.0%)
	兩側	13 (65.0%)
左側 (18)	右側	3 (16.7%)
	左側	4 (22.2%)
	兩側	11 (61.1%)
兩側 (48)	右側	14 (29.2%)
	左側	11 (22.9%)
	兩側	23 (47.9%)
合計 (86)	右側	22 (25.6%)
	左側	17 (19.8%)
	兩側	47 (54.6%)

拘ラズ肺結核ハ常ニ兩側ヲ同時ニ侵スコト多ク、右頸罹患患者ニ兩肺患 65.0%、左頸ノモノニハ兩肺患 61.0%、兩頸ノモノニハ兩肺患 47.9%アリ。又、頸右側ノモノニ於テ、肺右側 25.0%、肺左側 10.0%、頸左側ノモノニハ肺右側 16.7%、肺左側 22.2%、頸兩側ニハ肺右側 29.2%、肺左側 22.9%ナリ。

即チ、頸腺結核患者ニ合併セル肺結核病竈ハ頸患側ノ如何ニ據ラズ兩肺罹患多キモ、扁側肺罹患ノ場合ニハ頸患側ト同側ノモノ多カリキ。胸廓内所見ト頸腺結核性質ニ就キ、烏居ハ化膿性腺腫ノモノニハ肺結核 68.9%、非化膿性腺腫ノモノニハ 52.7%ナリトシ、且ツ、化膿性腺腫ニ合併セル氣管枝腺結核ハ進行性型ニ屬スルモノ過半数ヲ占メ、非化膿性腺腫ニハ治癒期ノモノ多數ナリシト謂ヘリ。

余ノ胸廓内「レ」的検査セル 380 名ニテハ(第 23 表参照)、頸腺腫増殖性(第一類)ヲ呈セルモノニハ、肺結核 21.5%、ソノ他病變 14.5%、

第 23 表 頸腺結核性質ト胸廓内所見ト關係

頸腺結核性質	胸廓内所見	肺結核 (%)	肋膜炎肺門腫脹 (%)	異常ナキモノ (%)	合計
第一類		64(21.5)	43(14.5)	190(64.0)	297
第二類		14(25.0)	7(12.5)	35(62.5)	56
第三類		8(29.6)	5(18.5)	14(51.9)	27
合計		86(22.6)	55(14.5)	239(62.9)	370

異常ナキモノ 64.0%。頸腺腫乾酪化或ハ化膿セルモノ (第二類)ニハ、肺結核 25.0%、ソノ他病變 12.5%、異常ナキモノ 62.5%、頸腺カ囊孔或ハ潰瘍形成セルモノニハ、肺結核 29.6%、

ソノ他病變 18.5%、異常ナキモノ 51.9%トナレリ。

即チ、烏居ノ謂ヘル如ク、頸腺腫化膿シ、或ハ囊孔ヲ作ルモノニハ肺結核罹患率多カリキ。

第六章 頸腺結核ノ「レ」線治療成績

頸腺結核「レ」線治療成績ノ階梯ヲ全治、輕快、不變ニ大別シテ觀察スルモ、施術ノ巧拙、患者ノ忍耐、患部ノ狀況等ハ治療成績ヲ左右シ、又輕快、不變ト記載セルモノ、内ニハ中途治療中止シタルモノアリテ、果シテ、ソノ成績如何ヲ概括シ難キコトアリ。

故ニ文獻ニ於ケル治療成績ヲ論ズルニ當リテハ十分ナル注意ヲ拂ハザルベカラズ。茲ニ各自ノ

治療成績ヲ著者ノ記スルマ、合計スルニ (第 24 表参照)、患者總數 1452 例ノ内、全治 833 例 57.4%、輕快 442 例 30.4%、不變 111 例 7.6%、不明 66 例 4.6%トナリ、「レ」線治療ハ大半良好ヲ示セルコトハ、頸腺腫ノ治療トシテ先ヅ第一著ニ施行スベク、而モ相當ナル成績ヲ擧ルモノト謂ハザルベカラズ。

放射術式ニ就キテハ、治療效果顯著ナルト同様、

第 24 表 邦人諸家ノ頸腺結核「レ」治療成績

報告者	年代	例數	全治(%)	輕快(%)	不變(%)	不明(%)
肥田(1)	明治 45	24	6 (25.0)			
土肥	大正 1	15	7 (46.7)	6 (40.0)	2 (13.3)	
丸山	大正 2	32	14 (43.8)	2 (6.3)	2 (6.3)	14 (43.8)
藤浪・山田	大正 3	61	28 (45.9)	24 (39.3)	9 (14.8)	
肥田(2)	大正 3	101	63 (62.4)	33 (32.7)	5 (5.0)	
服部	大正 3	37	12 (32.4)	13 (35.1)	4 (10.8)	8 (21.6)
河内山	大正 3	32	25 (78.1)	2 (6.3)	4 (12.5)	1 (3.1)
肥田(3)	大正 4	250	123 (49.2)	81 (32.4)	46 (18.4)	
飯森	大正 5	89	18 (20.2)	26 (29.2)	8 (9.0)	37 (41.6)
中村	大正 5	15	5 (33.3)	9 (60.0)	1 (6.7)	
川瀬	大正 11	148	131 (88.5)		17 (11.5)	
池田	大正 12	95	61 (64.2)	27 (28.4)	5 (5.3)	2 (2.1)
三矢(1)	大正 13	44	37 (84.0)	7 (16.0)	0 (0)	
林(信雄)	大正 14	72	24 (33.3)	37 (51.4)	11 (15.3)	
三矢(2)	大正 15	224	191 (85.2)	28 (12.5)	5 (2.2)	
金澤	昭和 4	172	149 (86.6)	23 (13.4)	0 (0)	
林(昌隆)	昭和 7	35	21 (60.0)	9 (25.7)	1 (2.9)	4 (11.4)
白井・平野	昭和 10	178	55 (30.9)	115 (64.6)	8 (4.5)	
福岡	昭和 10	1804	494 (27.4)	943 (52.3)	367 (20.3)	
合計		3256	1327 (40.8)	1385 (42.5)	478 (14.7)	66 (2.0)

(但シ、合計ニハ〇印ヲ除外セリ)

今ヤ論争ノ餘地ナキニ似タルモ、或ハ深部放射ヲ以テ可トシ、或ハ一般表在性放射ヲ以テ良トスルモノアルモ、要ハ患者ノ年齢、榮養状態、合併症ノ有無、腺腫ノ性質、殊ニ新鮮、陳舊及

ビ、硬度、癒著ノ有無等ヲ考察シ、且ツ又、放射後ノ経過ヲ良ク觀察シテ適宜ニ加減スベキモノナリ。余ノ探レル放射方法ノ 1 例ヲ示セバ、島津製「ダイヤナ號」、「クーリッジ」U型管球使

用、管球最高電壓 10 萬「ヴ、ルト」、濾過板 3 耗「アルミニウム」板、皮膚焦點間距離 30 糎、放射時間ハ 1 回 6 分乃至 20 分 (120 r ヨリ 200 r 迄トシテ) ニシテ、10 日乃至 2 週間ノ間歇ヲ置キテ放射ヲ繰返セリ。而シテ 3 回以上放射シ、且ツ経過明ラカナル 1804 例ニ於テ、全治 494 例 27.4%、輕快 943 例 52.3%、不變 367 例 20.3%ヲ得、之レヲ諸家報告ニ比較スルニ成績稍々劣レルガ、效果判定ハ各著者ニ依リ標準ヲ異ニシ、余ノ示セル全治トハ腺腫ノ消失、或ハ硬度ヲ増シテ著明ニ縮小セシモノヲ、輕快トハソノ程度ノ輕微ナルモノ、不變トハ 3 回放射以上數回迄ニ及ブモ未ダ效果現レザルモノトセリ。

一、頸腺結核ノ「レ」線治療成績ヲ年齢別ニ觀察スルニ、肥田ハ、1—10 歳 68.8%、11—20 歳 63.4%、21—30 歳 48.3%、31—40 歳 83.3%、41 歳以上 66.7%、即チ 31—40 歳ニ於テ最モ有效ニシテ 21—30 歳ニ成績惡シトセリ。林 (信雄) ハ 15 歳未満ノモノニ成績最好ニシテ加齡ト共ニ效果減退スト謂ヒ、之レ年少者ハ概シテ早期治療ヲ受クルコト多キニ、成人若シクハ高年者ハ動モスレバ永クマデ腺塊ヲ放置スル結果ナリト。余ハ 1804 名ヲ調査セシニ (第 25 表參照)、治療率 (全治及ビ輕快例) ハ 1—10 歳 82.7%、11—20 歳 79.9%、21—30 歳 77.7%、31—40 歳 82.1%、41 歳以上 78.9%トナリ、1—10 歳ニ於テ最良好、漸次加齡ト共ニ成績低下シ、21—30 歳期ニ最低ナルモ、更ニ、次年度即チ、31—40 歳ニハ再び良好ヲ示シ、41 歳以上ニハ再び不成績トナレリ。今、昭和 6 年度内務省全結核死亡年齢

第 25 表 年齢ト治療成績トノ關係

年 齡	人員	全治 (%)	輕快 (%)	不變 (%)
1—10	243	73 (30.0)	128 (52.7)	42 (17.3)
11—20	636	176 (27.7)	332 (52.2)	128 (20.1)
21—30	655	158 (24.1)	351 (53.6)	146 (22.3)
31—40	180	60 (33.3)	88 (48.8)	32 (17.8)
41 以上	90	27 (30.0)	44 (48.9)	19 (21.1)
合 計	1804	494 (27.4)	943 (52.3)	367 (20.3)

ヲ參酌スルニ、ソノ死亡率ハ頸腺結核治療率ト相對的ノ關係ヲ示セリ。即チ、頸腺結核治療成績最良ナル 1—10 歳ハ、全結核死亡率ノ最低年齢期ニ該當シ、頸腺結核治療不成績ト共ニ全結核死亡率モ亦多クナリテ、效果最不良ナル 21—30 歳ハ全結核死亡最高ニ達シ、效果率再び良好トナレル 31—40 歳ニハ結核死亡者再び減少シ、41 歳以上ノ治療率低キ時期ハ全結核死亡比較的多キモノナリ。

之レヲ要スルニ、頸腺結核ノ「レ」線治療ハ、年齢ト密接ナル關係ニアリ。即チ、全結核ニ侵サレ易キ年齢期ノモノホド效果不良ナリトス。

二、「レ」線治療成績ヲ性別ニ檢索セルモノハ、林 (信雄) ハ男子 79.1%、女子 86.8%ノ效果ヲ獲、女性ニ良好ナリトセリ。

余ノ治療成績ハ (第 26 表參照)、奏效率男子 77.9%、女子 80.9%ニシテ、女子ニ良好ナリ。更ニ、年齢別ニ男女ヲ比較スルニ、10 歳未満ニテハ奏效率男子 83.1%、女子 82.4%ニシテ男子ニ稍々良好ナル如キモ、11 歳以上ノ各年齢期ニテハ女子ニ有效率高シ。林ハ女性ニハ概シテ治療回数多ク、男性ニハ長期間放射ノ少キ結果ニ

第 26 表 性別ト治療成績トノ關係

年 齡	男 (%)				女 (%)			
	人員	全 治	輕 快	不 變	人員	全 治	輕 快	不 變
1—10	124	21.8	61.3	16.9	119	38.7	43.7	17.6
11—20	256	21.1	57.0	21.9	380	32.1	49.0	19.0
21—30	241	24.1	51.2	24.8	414	24.1	55.1	20.8
31—40	59	35.6	44.1	20.4	121	32.2	51.3	16.6
41—以上	33	18.2	54.5	27.3	57	25.0	56.3	18.8
合 計	713	23.3	54.6	22.2	1091	30.1	50.8	19.1

由來シ、必ズシモ性ニヨル直接ノ影響ニ非ズシテ、女性ハ全治ヲ希望スル熱心ヨリ、受療回數モ多ク、從ツテ治癒率ノ男子ニ比シテ多キ所以ナリト謂ヘリ。余モ亦同様ノ思考ヲ抱クモノニシテ、余ノ場合ニ於テモ男子一人放射平均回數6.5回、女子8.9回ニ當リ、女子ハ比較的良ク治療ニ努ムレバ、從ツテ良好ナル治療成績ヲ納ムル所以ナリ。

三、頸腺結核ノ患側ト「レ」線治療成績トニ就キ、池田ハ兩側罹患76.2%、扁側罹患62.5%ノ治癒率ヲ示シ、側別ニハ差異ナシトセリ。余ノ成績ニテモ(第27表参照)、扁側罹患ノ左右有效率殆ンド同様ニシテ、右側78.0%、左側78.2%ナルモ、兩側罹患ハ扁側罹患ニ比シ治癒率良好ニシテ81.0%ノ成績ヲ得タリ。之レ扁側罹患ニハ瘻孔乃至潰瘍形成ノモノ多ク(余ノ場合ニ於テ扁側罹患患者ニ來レルモノ57.6%、兩側罹患患者ニ來レルモノ42.4%ナリキ)、兩側罹患ニハ増殖非化膿性ノモノ(兩側罹患患者ニハ60.2%、

第 27 表 罹患側ト治療成績トノ關係

患側	人員	全治(%)	輕快(%)	不變(%)
右側	432	114(26.4)	223(51.6)	95(22.0)
左側	413	84(20.3)	239(57.9)	90(21.8)
兩側	959	296(30.9)	481(50.1)	182(19.0)
合計	1804	494(27.4)	943(52.3)	367(20.3)

扁側罹患患者ニハ39.7%ナリキ)多キ事實ニ由ルモノナリ。即チ、瘻孔、潰瘍ヲ形成セルモノハ一般ニ榮養不良、抵抗力モ弱ク、「レ」線放射成績モ不良ナルモノナリキ。

四、頸腺結核所在位置ニ就キ、林(信雄)ハ顎下腺治癒率81.9%、側頸腺58.1%、腋窩腺及ヒ鎖骨上窩腺各50.0%トセリ。

余ノ場合ニ於テハ(第28表参照)、有效率側頸部83.2%、顎下部77.0%、耳下部72.7%、鎖骨上窩部71.4%ノ順位トナリ、男女共ニ側頸部、顎下部ハ良好ナル治癒率ヲ示スモ、鎖骨上窩部(男子)、耳下部(女子)ハ比較的の不良ナリキ。

林(信雄)ハ顎下腺ノ治癒率良好ナルハ、該部罹

第 28 表 發生部位ト治療成績トノ關係

部 位	男		女		合 計	
	人員	全治及ビ輕快(%)	人員	全治及ビ輕快(%)	人員	全治及ビ輕快(%)
側 頸 部	128	99 (77.3)	389	331 (85.1)	517	430 (83.2)
顎 下 部	88	65 (73.9)	121	96 (79.3)	209	161 (77.0)
耳 下 部	17	13 (76.5)	16	11 (68.8)	33	24 (72.7)
鎖骨上窩部	9	6 (66.7)	19	14 (73.7)	28	20 (71.4)
合 計	242	183 (75.6)	545	452 (82.9)	787	635 (80.7)

患者ニ合併疾患少ク、單獨ナルニ反シ、腋窩腺及ヒ鎖骨上窩腺罹患患者ニハ肺或ハ肋膜疾患ノ合併多ク、又、腋窩腺ハ深部ニ位シ、鎖骨上窩腺ハ鎖骨下ニ隠レテ放射不十分ナル爲メソレゾレ不良成績トナレリト。

余ノ經驗ニ於テハ鎖骨上窩部ニテモ、放射技術ニ不都合ナク執行シ得、又、胸内合併症必ズシモ多カラザリキ、即チ余ノ成績ニ在リテハ必ズシモ所在位置ニヨリ治療成績ハ左右セラル、モノニ非ズトス。

五、林(信雄)ハ瘻孔アレバ治癒最モ不良ナルモ、非瘻孔ノモノニテハ腺腫ノ多寡、孤群ノ別

ナク同様ノ治癒率ヲ示ストセリ。

余ノ成績(第29表参照)ヲ觀ルニ、治癒率ハ單獨ノモノ84.7%、散在ノモノ83.8%、簇生ノモノ66.6%トナリテ、前二者ニハ略々同率ノ良好ナル成績ヲ示スモ、後者ハ稍々劣レリ。即チ腺腫ノ單發、又ハ散在ノモノニハ治療效果良好

第 29 表 分佈狀況ト治療成績トノ關係

分佈狀況	人員	全治(%)	輕快(%)	不變(%)
單獨	307	86(28.0)	174(56.7)	47(15.3)
散在	1077	313(29.1)	584(54.2)	180(16.7)
簇生	420	95(22.6)	185(44.0)	140(33.3)
合計	1804	494(27.4)	943(52.3)	367(20.3)

ニシテ 83 乃至 85 % ノ治癒率ヲ示スモ、腺腫ガ略々重積、或ハ癒合シテ大塊ヲ爲セバ前者ニ比シ稍々不良トナリ、略々 67 % ナリキ。

六、更ニ、頸腺結核ノ性質ヲ前述第一類（増殖性）、第二類（乾酪乃至化膿性）、第三類（潰瘍又ハ瘻孔アルモノ）、ニ分チテ、諸家ノ報告ヲ比較スルニ（第 30 表参照）、藤浪・山田兩氏ハ第一類 90.0 %、第二類 80.0 %、第三類ハ未驗ナリトシ、服部ニハ第一類 72.2 %、第三類 62.5 %、第二類 36.4 % ノ順位、肥田ニハ第三類 90.5 %、第一類 82.1 %、第二類 72.7 %、池田ニハ第三類 94.1 %、第一類 92.2 %、第二類 87.5 % ナリ

ト。金澤ハ第一類 90.7 %、第二類 83.9 %、第三類 69.6 % ニシテ、各家ノ成績必ズシモ一定セザルガ、今、諸家報告ヲ合算スレバ第一類 442 例ノ内 382 例 86.4 %、第三類 70 例ノ内 56 例 80.0 %、第二類 103 例ノ内 77 例 74.8 % ノ治癒ヲ示シ、第一類最良、第三類、第二類ノ順位トナルモ、余ノ成績ニテハ、第一類 81.0 %、第二類 74.1 %、第三類 70.9 % ノ順位ニシテ、第二類ノ成績ハ第三類ノ成績ヨリ勝レリ。而シテ、今、文献竝ニ余ノ統計數ヲ合算スレバ第一類 82.5 % ニシテ最良ナルモ、第二類 74.4 %、第三類 74.7 % ハ略々同様ナリ。

第 30 表 邦人諸家報告ノ頸腺結核性質ト治療成績トノ關係

報告者	第一類		第二類		第三類		合計	
	人員	全治及ビ輕快例 (%)	人員	全治及ビ輕快例 (%)	人員	全治及ビ輕快例 (%)	人員	全治及ビ輕快例 (%)
藤浪・山田	40	36(90.0)	20	16(80.0)	1	0(0)	61	52(85.2)
服部	18	13(72.2)	11	4(36.4)	8	5(62.5)	37	22(59.5)
肥田	196	161(82.1)	33	24(72.7)	21	19(90.5)	250	204(81.6)
池田	70	65(92.2)	8	7(87.5)	17	16(94.1)	95	88(92.6)
金澤	118	107(90.7)	31	26(83.9)	23	16(69.6)	172	149(86.6)
福岡	1175	952(81.0)	214	159(74.1)	96	68(70.9)	1485	1179(79.4)
合計	1617	1334(82.5)	317	236(74.4)	166	124(74.7)	2100	1694(80.7)

七、治癒ニ至ル迄ノ「レ」線放射回数ノ多少ハ、放射條件ニ關與スルモノニシテ、之レヲ一律ニ比較觀察スルハ不可ナルモ、各著者ニ於テ、同一條件ノ下ニ加療セラレタル場合ノ放射回数ヲ觀ルニ（第 31 表参照）佐藤（銀一）ハ皮膚焦點間距離 20 糎、1—2 糎ノ「アルミニウム」板ヲ以テ濾過シ、1 回 5—8 H ヲ放射シタルニ第一類ハ 1 人平均 6.2 回、第二類ノ内、癒著結締織増加アルモハ 12.3 回、化膿セルモノハ 18.2 回、第三類 16.9 回ヲ要セリト。池田ハ皮膚焦點間距離 30 糎、3 糎ノ「アルミニウム」板ニテ濾過シ、1 回放射量 5 H トシタルニ、第一類ニハ平均放射回数(118 日間)8.3 回、第二類(138 日間)9.6 回、第三類(180 日間)12.8 回ヲ要セリト。即チ、第一類ハ最短時間ニテ、且ツ、回数モ少ク治癒スト謂ヘリ。余ハ主トシテ既述ノ如キ放射方法ヲ採レルニ、全治者 410 名ニ於テ、第一

第 31 表 頸腺結核性質ト全治迄ノ放射回数

著者	佐藤(銀一)	池田	福岡
人員	903名	95名	410名
第一類	6.2回	8.3回(118日)	8.6回
第二類	癒著性12.3回 化膿性18.2回	9.6回(138日)	11.2回
第三類	16.9回	12.8回(180日)	13.9回

類 8.6 回、第二類 11.2 回、第三類 13.9 回ナリキ。

即チ、増殖性ニテ可動ノモノハ最モ少回数ニテ治癒シ、乾酪乃至化膿性ノモノ之ニ次ギ、瘻孔又ハ潰瘍形成セルモノハ比較的多クノ回数ヲ要シタリキ。

八、結核性既往症ヲ有スルモノ 469 名、有セザルモノ 1271 名ニ就キテ頸腺結核ノ治療成績ヲ觀ルニ、第 32 表ノ如ク、結核性既往症ヲ有スルモノ、奏効率 75.1 % ハ然ラザルモノ、奏効率

第 32 表 既往症ト治療成績トノ關係

既往症	人員	全治(%)	輕快(%)	不變(%)
有結核性疾患	469	120(25.6)	232(49.5)	117(24.9)
然ラザルモノ	1271	359(28.2)	672(52.9)	240(18.9)
合 計	1740	479(27.5)	904(52.0)	357(20.5)

81.1%ニ比較シテ劣レリ。

林(信雄)ハ結核性疾患合併者 17 名ニ於テ、ソノ頸腺結核ノ治療效果アリシモノ 75.1%、全頸腺結核患者 72 名ノ有效率 84.6%ニシテ前者ハ成績不良ナリト。

余モ亦、胸廓内「レ」的検査セル 288 名ニ就キテ、之レヲ見ルニ、結核疾患アルモノ 94 名、無キモノ 194 名ノ治療成績ハ、第 33 表ニ示ス如ク、有

結核合併者ノ奏效率 69.1%、無結核合併者ノ奏效率 78.8%ニシテ、前者ガ成績不良ナリキ。

第 33 表 合併症ト治療成績トノ關係

胸廓内合併症	人員	全治(%)	輕快(%)	不變(%)
有結核性疾患	94	23(24.5)	42(44.7)	29(30.9)
然ラザルモノ	194	56(28.9)	97(50.0)	41(21.2)
合 計	288	79(27.4)	139(48.3)	70(24.3)

之レヲ要スルニ、本症以外ノ結核性疾患有無ハ本症ノ治療成績ニ影響スルコト大ニシテ、殊ニ、既往ニ結核症ヲ罹患セシモノト、結核疾患合併アルモノトノ奏效率ヲ比較スルニ、合併セルモノハ既往ニ罹患セシモノヨリ一層不良ナリキ。

第七章 結 論

余ハ我教室ノ大正 13 年以降、昭和 8 年迄、滿 10 ヲ年間ニ加療セシ頸腺結核患者 3449 名ヲ基礎トシ、種々ノ方面ヨリ統計的觀察ヲ試ミ、且ツ、1804 名ニハ治療成績ヲ調査セリ。ソノ結果ヲ總括スレバ次ノ如シ。

一、頸腺結核患者 3449 名ノ内、男子 1426 名 41.3%、女子 2023 名 58.7%ニシテ、女子ニ多カリキ。

二、頸腺結核ノ好發年齡ハ男女共ニ 16—25 歳、就中 21—25 歳(青年期) 23.8%ニ最多、16—20 歳(破瓜期) 21.5%之レニ次ギ、ソノ前後ニ於テハ漸次減少シ、大略、全結核死亡年齡ニ順應スルモ、頸腺結核ハ尙、幼年期ノ 5—9 歳ニ比較的好發シ、40 歳以降ニハ少シトス。

三、頸腺結核ハ、兩側患 54.7%ニシテ、扁側患 45.3%ヨリ多く、扁側患ノ内、右側 51.1%、左側 48.9%略々同率ナリ。而シテ、兩側患ハ男子ニ多く、扁側患ハ女子ニ多シ。更ニ、左側患ハ男子ニ多く、右側患ハ女子ニ多シトス。

兩側罹患ハ男女共ニ年少者ニ多く、加齡ト共ニ減少スルモ、扁側患ハ之レニ反ス。

四、頸腺結核患者ニ腋窩腺結核合併 190 名 5.5%アリ、内、男子 32.1%、女子 67.9%。鼠蹊腺結核合併者ハ 18 名 0.5%ニシテ、内、男子

61.1%、女子 38.9%ナリ。

頸患側ト腋窩罹患側トハ同側ノモノ多く、又、兩頸罹患患者ニハ兩側腋窩腺合併ガ多シトスルモ、頸患側ト鼠蹊患側トニハ一定ノ關係ヲ認メザリキ。

五、頸腺結核ハ、側頸部 76.7%、顎下部 56.3%、耳下部 20.0%、鎖骨上窩部 17.5%ノ好發順位ヲ呈シ、同一部位ヲ侵スモノ 44.8%、各部位ニ併發スルモノ 55.2%トナリ、單發發生ノモノハ側頸部最モ多く、各部位發生ノモノハ側頸部、顎下部併發最多ナリ。且ツ、一側一部位ニ發生スルモノト、兩側同部位ニ對象ニ發生スルモノトハ略々同率ナルモ、一側各部位併發ヨリハ兩側各部位併發ノモノ多カリキ。

側頸部罹患ハ女子ニ多く、顎下部、耳下部、鎖骨上窩部ハ男子ニ多シトス。

側頸部罹患ハ男女共ニ各年齡期ヲ通ジテ最多ナルモ、殊ニ女子 21—40 歳ニ多シ。顎下部罹患ハ男子ニテハ高年者ニ、女子ニテハ年少者ニ比較的多シ。耳下部罹患ハ男子ニテハ比較的年少者ニ多く加齡ト共ニ減少スルモ、女子ニテハ年齡的動搖少シトス。鎖骨上窩部罹患ハ男女共ニ年少者ニ少ク加齡ト共ニ増加セリ。

六、頸腺結核ハ散在ノモノ 57.6%、簇生ノモノ

24.1%、單獨ノモノ 18.4%ニシテ、散在ノモノハ男子ニ多く、單獨ノモノハ女子ニ多キモ、簇生ノモノハ男女同率ナリキ。又、散在ノモノハ男女何レモ年少者ニ多く、加齡ト共ニ減少スルモ、單獨ノモノハ男女共ニ年齢の動搖少キガ、比較的高年者ニ多く、簇生ノモノハ男女共ニ年齢ト一定ノ關係少ナシ。

七、頸腺結核ニハ増殖性 72.6%、乾酪乃至化膿性 18.9%、潰瘍及ビ有癢性 8.6%アリ、増殖性ノモノハ女子ニ多キモ、ソノ他ハ男子ニ多シトス。

増殖性ノモノハ男女共ニ比較的幼年者ニ多く、潰瘍及ビ有癢性ノモノハ高年者ニ多キモ、乾酪乃至化膿性ノモノハ年齢ト一定ノ關係ナカリキ。

八、頸腺結核患者ノ既往症ヲ觀ルニ、病歴ナキモノ 46.3%、病歴アルモノ 53.7%ニシテ、内、非結核性疾患 49.2%、結核性疾患 50.2%ナリ、ソノ内、呼吸器結核最多 69.1%アリ、之レヲ内別スルニ肋膜炎 67.0%、肺結核 23.4%。ソノ他、消化器結核 13.2%、外科結核 13.0%、泌尿器結核 4.7%ナリトス。

九、頸腺結核患者 38.0 名ノ胸廓内「レ」的検査上、異常ナキモノ 62.9%、病變アリシモノ 37.1%、ソノ内、肺結核 61.0%、肋膜炎及ビ同後胎症 22.7%、肺門腫脹 16.3%ニシテ、肺結核ノ内ニハ廣汎性ノモノ多く、且ツ、陳舊性ノモノ多カリキ。

十、頸腺結核患者ノ肺結核合併率ハ破瓜期 31.5%最多、青年期 24.2%、壯年期 23.5%、幼年期 15.3%、老年期 9.5%ノ順位ニシテ、略々全結核死亡年齢ニ順應セリ。

十一、頸腺結核患者ニ合併セル肺結核ノ病側ハ、兩側 54.6%、右側 25.6%、左側 19.8%ニシテ、頸患側ノ如何ニ拘ラズ兩肺罹患多キモ、扁側罹患ハ頸患側ト同側ノモノ多カリキ。

十二、頸腺結核性質ト胸廓内「レ」的所見トノ關係ヲ觀ルニ、頸腺腫増殖性ノモノニハ肺結核ニ 1.5%、乾酪乃至化膿性ノモノニハ肺結核 25.0

%、潰瘍及ビ有癢性ノモノニハ肺結核 29.6%ノ合併ヲ來セリ。即チ、頸腺腫ノ惡化セルモノニハ肺結核合併多カリキ。

十三、頸腺結核ノ「レ」線治療成績ハ、全治 27.4%輕快 52.3%、不變 20.3%ニシテ、男子ニハ 77.9%、女子ニハ 80.9%ノ奏效率(全治及ビ輕快セルモノ)ヲ擧ゲ、1人放射平均回數男子 6.5回、女子 8.9回トナレリ。即チ、女子ハ男子ヨリ良ク治療ニ努メタリ。

年齢別ニヨル奏效率ハ 10歳未満ガ最高率ニシテ 82.7%ヲ示シ、加齡ト共ニ不成績トナリ 21—30歳 77.7%ノ不良トナレルモ、31—40歳ニ於テ再ビ治療奏效率高ク 82.1%ヲ示シ、41歳以上ニ於テハ 78.9%トナレリ。即チ、全結核ニ侵サレ易キ年齢期ノモノホド效果不良トナルヲ知レリ。

兩側罹患奏效率 81.0%、扁側罹患ハ、右側 78.0%、左側 78.2%ニシテ略々同率トナレリ。

所在位置別ニヨル治療奏效ハ、側頸部 83.2%、顎下部 77.0%、耳下部 72.7%、鎖骨上窩部 71.4%ノ順位トナレリ、即チ、男女共ニ側頸部、顎下部ノモノハ治療ニシ易キモ、鎖骨上窩部(男子ニ)、耳下部(女子ニ)ハ比較的の不良ナリ。

腺腫ノ性質上ヨリ、奏效率ヲ見ルニ、單獨ノモノ 84.7%、散在ノモノ 83.3%、簇生ノモノ 66.6%ノ順位トナリ、單獨、散在セルモノニ比シテ簇生ノモノハ不良ナルヲ示シ、又、増殖性 81.0%、乾酪乃至化膿性 74.1%、潰瘍及ビ有癢性 70.9%ノ治療成績ヲ納メタリ。更ニ、治療奏效ノ放射回數ハ、増殖性ニテハ平均 8.6回、乾酪乃至化膿性ニテハ平均 11.2回、潰瘍及ビ有癢性ニテハ平均 13.9回ナリキ。

頸腺結核患者ノ他結核性既往症及ビ現症併有者ノ治療成績ヲ見ルニ、結核性既往症ヲ有スルモノ、奏效率 75.1%、有セザルモノ、奏效率 81.1%ナリ、而シテ又、結核性合併症有ルモノ、奏效率 69.1%、然ラザルモノ、奏效率ハ 78.8%トナレリ、即チ、本症以外ノ結核性疾患有無ハ本治療ニ多大ノ關係アルモノニシテ、殊ニ、過

去ニ結核性疾患ヲ罹患セシモノヨリ、現在合併セルモノ、本症治療成績ガ一層奏效不良ナルヲ示セリ。

擱筆ニ當リ恩師藤浪教授ノ御懇切ナル御指導御鞭撻竝ニ御校閲ヲ謹ミテ感謝ス。

主要文獻

1) 淺原慎次郎, 外科的結核瘰癧ニ對スル治療法ノ現況. 日新醫學. 第二年. 第四號. 大正元年. 2) H. Assmann, Die Klinische Röntgendiagnostik der Inneren Erkrankungen 1926. 3) Baisch, Die Behandlung chirurgische Tuberkulose besonders der tuberkulösen Lymphome mit Röntgenstrahlen. M. med. W. 1911. 4) 土肥軍司, 「レ」線ノ皮膚治療學上ノ應用竝ニ實驗例. 皮膚科泌尿器科雜誌. 第一卷. 第九號. 明治四四年. — 結核性淋巴腺腫ノ「レ」線療法. 治療新報. 第一卷. 第一二五號. 大正元年. 5) 藤浪剛一, 山田亮, 頸腺結核ノ「レ」線療法. 治療新報. 第一三卷. 第一四五號. 大正三年. — 皮膚科泌尿器科雜誌. 第一四卷. 第五號. 大正三年. 6) F. Fischer, Krankheiten der Lymphgefäße, Lymphdrüsen u. Blutgefäße. Deutsche Chirurgie. Bd. 24. 1901. 7) S. Gräff u. L. Kúpferle, Die Lungenphthise. 1923. 8) H. Gissel u. P. G. Schmidt, Die Lungentuberkulose. 1933. 9) 肥田七郎, 淋巴腺結核ノ「レ」療法. 日本外科學會雜誌. 第一三卷. 第一號. 明治四五年——外科的結核病ノ「レ」療法. 陸軍々醫團雜誌. 第四九號附錄. 大正三年. — 外科ニ於ケル「レ」線. 日本外科學會雜誌. 第一六卷. 大正四年. 10) 服部清一, 淋巴腺結核ノ「レ」療法. 日本外科學會雜誌. 第一五卷. 第一號. 大正三年. — 淋巴腺結核ノ統計的觀察. 醫學中央雜誌. 第一二卷. 大正三年. 11) 林信雄, 淋巴腺腫ニ對スル「レ」療法效果ノ統計的觀察. 結核. 第三卷. 第九號. 大正一四年. 12) 原邦郎, 結核性疾患ノ「レ」線療法. 昭和八年. 13) 林昌隆, 我教室ニ於ケル結核性頸部淋巴腺炎ノ「レ」線療法. 第三五回九州醫學會々誌. 二〇七. 昭和七年. — 日本放射線醫學會雜誌. 第一卷. 第一號. 昭和八年. 14) 飯森益太郎, 「レ」療法ノ腺結核ニ對スル效果ニ就テ. 日本外科學會雜誌. 第一七卷. 第一號. 大正五年. 15) 池田三千畝, 頸部淋巴腺結核ノ「レ」線治療成績. 醫事新聞. 第一一二三號. 大正一二年. — 頸部淋巴腺結核患者ノ年齡ニ就テ. 東京醫事新誌. 第二三五三號. 大正一三年. 16) 今福正喜, 頸腺結核ノ療法. 醫學中央雜誌. 第一五卷. 第二五八號. 大正六年. 17) 磯部喜右衛門, 頸部結核性淋巴腺炎. 診斷ト治療. 第一四卷. 第一號. 昭和二年. 18) 板津三良, 脊椎「カリエス」ニ關スル一考察. 結核. 第八卷. 第一〇號. 昭和五年. 19) 金森義雄, 頸腺結核ノ「レ」線療法ニ就テ. 治

療及處方. 第三〇號. 大正一一年. 20) 金澤信太郎, 惡性腫瘍及淋巴腺結核ノ「レ」線深部治療成績ニ就テ. 海軍々醫會雜誌. 一七卷. 六號. 昭和四年. 21) 神立金作, 頸腺結核ノ「レ」線治療成績. 日本レントゲン學會雜誌. 第七卷. 第一號. 昭和四年. 22) 神部泰英, 藤野守次, 虛弱兒童ニ關スル觀察. 日本放射線醫學會雜誌. 第二卷. 第四號. 昭和九年. 23) 勝矢信一, 本邦結核死亡統計. 診斷ト治療. 臨時增刊一〇編. 昭和八年. 24) 川瀬潔, 結核性頸腺炎X光線療法. 日本外科學會雜誌. 第二三回. 第一〇號. 大正一二年. — 外科的結核性疾患ノX線療法. 治療新報. 第二四卷. 二二號. 大正一四年. 25) Kienböck, Die Radiotherapie der tuberkulösen Lymphome. Arch. f. physik. Med. u. med. Technik. Bd. V u. Röntgentaschenbuch Bd. III 1911. 26) 河內山政一, 頸部淋巴腺腫ニ對スル「レ」治療. 醫學療法雜誌. 第一卷. 第七號. 大正三年. 27) 三輪德寬, 三輪外科叢書. 第一編——頸部淋巴腺結核診斷及治療. 近世醫學. 第七卷. 一二號. 大正九年. — 外科的結核ノ療法. 東京醫事新誌. 二二六〇號. 大正一一年. 28) 三矢辰雄, 結核性疾患ニ對スル「レ」線深部治療ノ治療. 愛知醫學會雜誌. 第三一卷. 第一號. 大正一三年. 第三三卷. 第二號. 大正一五年. — 淋巴腺結核ノ深部治療. 治療新報. 二五卷. 一一號. 大正一五年. 29) 宮原立太郎, 瘰癧トX光線療法. 大日本私立衛生會雜誌. 第四〇八號. 大正六年. 30) 丸山震五郎, 結核性淋巴腺腫ノ「レ」線放射療法. 日本外科學會雜誌. 一四卷. 大正二年. 31) 茂木藏之助, 茂木外科總論. 各論——肺結核ト外科的疾患. 診斷ト治療. 臨時增刊結核瘰癧ニ肺結核. 昭和八年. 32) 前田和三郎, 脊椎「カリエス」ト肺結核. 診斷ト治療. 臨時增刊. 結核瘰癧ニ肺結核. 昭和八年. 33) A. Most, Chirurgie der Lymphgefäße und der Lymphdrüsen. Neue Deutsche Chirurgie Bd. 24. 1917. 34) 中島薰代, 結核性淋巴腺腫ノX光線療法. 治療新報. 第一七卷. 大正七年. 35) 中村德吉, 淋巴腺結核及ビ他ノ二三結核症ノX線療法. 日本外科學會雜誌. 一五卷. 一號. 大正五年. 36) 內務省結核死亡統計, 昭和二年乃至昭和七年度. 37) 野瀬善三郎, 本邦結核死亡ノ統計的研究. 長崎醫學會雜誌. 第三卷. 第四號. 大正一四年. 37) 佐藤進, 頸部結核性淋巴腺腫ニ就テ. 日本外科學會雜誌. 第五卷. 明治三六年. 38) 佐藤銀一, 淋巴腺結核ノ「レ」療法

(統計的觀察). 日本外科學會雜誌. 第二〇卷. 大正八年. 40) 志賀達雄, 結核性頸部淋巴腺炎. 四五〇例ニ對スル深部治療效果. 日本醫科大學雜誌. 四卷. 一二號. 昭和八年. 41) 莊鳳四郎, 結核性淋巴腺腫ノ「レ」療法. 實驗醫報. 第一五卷. 一七六號. 昭和四年. 42) Schinz, Banach, Friedel, Lehrbuch der Röntgendiagnostik 1932. 43) 竹内節, 頸部淋巴腺腫膜ト肺症狀. 治療及處方. 第一一卷. 第二冊. 昭和五年. 44) 高橋明, 泌尿器結核. 診斷ト治療. 臨時增刊. 結核殊ニ肺結核. 昭和八年. 45) 鶴田績次郎, 結核性頸部淋巴腺炎. 日本外科學會雜誌. 五卷. 明治三六年. 46)

富田和三郎, 山崎温, 淋巴腺結核ト胸廓内所見トノ關係ニ就テ. 千葉醫學會雜誌. 第三卷. 第五號. 大正一四年. 47) 鳥居環, 「レ」學上ヨリ見タル頸腺結核ト氣管枝腺結核. 十全會雜誌. 第二九卷. 第一〇號. 大正一三年. 48) 臼井泰藏, 平野壽, 結核性頸腺炎ノ統計的觀察. 結核. 第一三卷. 第一號. 昭和一〇年. 49) 渡邊虎太, 淋巴腺結核ノ統計的觀察. 日本外科學會雜誌. 第一七卷. 第一號. 大正五年. 50) J. Wetterer, Die Strahlenbehandlung der Tuberkulose. (Tuberkulöse Lymphom) St. Therapie. XI, 1920.